

板付周辺遺跡調査報告書

(11)

下水道工事に伴う調査(1984・85年度)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集

1986

福岡市教育委員会

正説表

第135集 一板付周辺遺跡調査報告書 (11) -

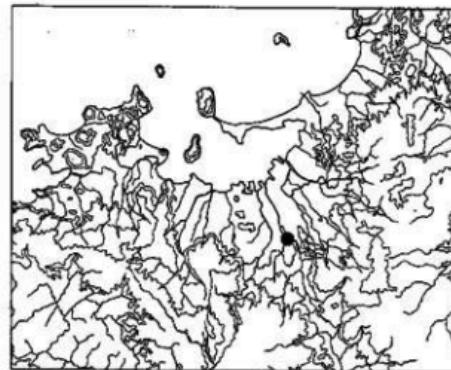
頁 例 言 撰 圖 目 次	行 15 西36 圖37	款 文化層長 SK25 SK28	埋藏文化財類長 SX28 SX28
	5 7 8 10	田面上に この2層 即調査区	水田面上に この二層 既調査区 縮尺 1:30
	11 20 21 26 27 32.	5層は SK3-SK4と 移りかねるものとが 見られるものが SK28 SK28 SK28 SK4-SK28 SK4-SK28	シルト層 15層は SK3-SK5と 移りかわるものとが 見られるものが SK28 SX28 SX28 遺物は少量の SK4-SK28 接するE5・6区の 掘り込まれたK1が
	8 9 图9 图10	6 1 20 6 6 9	シルト層 5層は SK3-SK4と 移りかねるものとが 見られるものが SK28 SK28 SK28 SK28 SK28 接するE5・6区の 掘り込まれたK1が

板付周辺遺跡調査報告書

(11)

下水道工事に伴う調査(1984・85年度)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集



8439

8440

8531

8612

1986

福岡市教育委員会

序 文

板付遺跡は、わが国でも最初に稲作を取り入れた弥生文化発祥の地として全国的にも著名なところであります。この板付遺跡における埋蔵文化財の調査は弥生文化の特質を知るうえで貴重な資料を提供してくれています。

今回の下水道敷設にともなう調査では、水田跡、旧河川跡などが検出され、板付遺跡の全容を知るうえで、大切な知見を得ることができました。これらの資料が、埋蔵文化財に対する御理解の一助となり、市民の皆様方に広く御活用していただければ幸いです。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　言

1. 本書は、下水道建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和59・60年度に実施した、E7a区・F5d区・G6d区・F5e区の調査報告書である。

2. 調査組織

昭和59年度調査(昭和59年9月14日～9月27日、10月27日～昭和60年1月31日)

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾 学

調査庶務 埋蔵文化財第1係 松延好文

調査担当 埋蔵文化財第2係 柳沢一男・杉山富雄

昭和60年度調査 (昭和60年7月18日～10月23日)

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化課長 柳田純孝

埋蔵文化財第1係長 折尾 学

調査庶務 埋蔵文化財第1係 松延好文

調査担当 埋蔵文化財第1係 小畠弘己

3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I、II、III……………杉山

IV、V、VI……………小畠

4. 本書に掲載した遺物実測図・造構実測図の作成・トレースは、担当者のはかに山口謙治、吉留秀敏、野村俊之が当った。

5. 本書に掲載した写真は、撮影を小畠・杉山が行った。

6. 本書の編集は、杉山が行った。

7. 本書に使用する基準方位は磁北である。真北との偏差は、西偏6度40分である。

本文目次

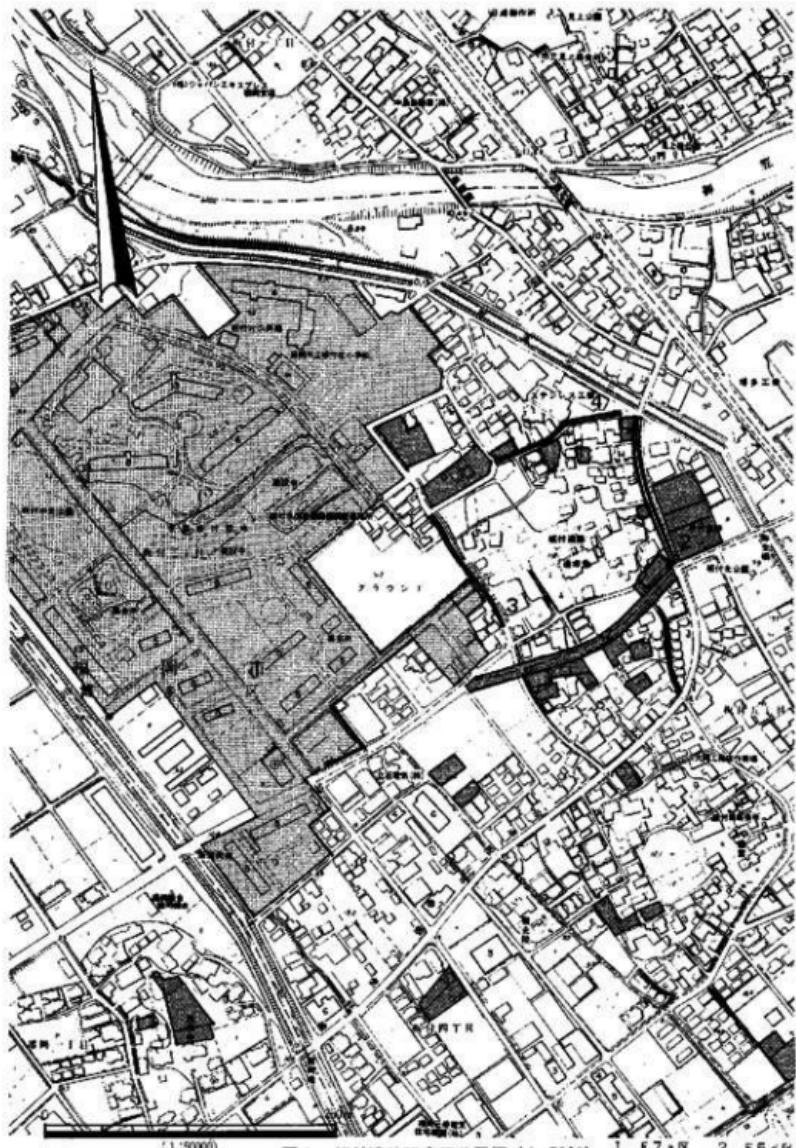
I	はじめに	1
II	E7a区の調査	3
III	F5d区の調査	7
IV	G6b区の調査	33
V	F5e区の調査	55
VI	おわりに	56

挿図目次

図1	板付遺跡調査区位置図(1:5000)	1
図2	板付遺跡の位置(1:50000)	1
図3	E7a区全体図(1:800)	2
図4	E7a区	3
図5	E7a区各調査区(1:100)	4
図6	E7a III区	5
図7	E7a区出土遺物(1:4)	6
図8	F5d区調査風景	7
図9	F5d区全体図(1:1000)	8
図10	各区の土層	10
図11	F5d I区(1:100)	11
図12	SK1(1:40)	11
図13	F5d I区の遺構	12
図14	SK1出土遺物(1:4)	13
図15	F5d II区(1:100)	14
図16	SK2(1:40)	15
図17	F5d II区	15

図18 SK2出土遺物 1 (1:4).....	16
図19 SK2出土遺物 2 (1:4)	17
図20 SK3・6・7・8(1:40).....	18
図21 F5dII区の遺構	18
図22 SK3・SK4出土遺物(1:4).....	19
図23 SK4 (1:40).....	20
図24 SK5 (1:40).....	20
図25 F5dII区の遺構	20
図26 F5dIII区 (1:100).....	21
図27 SK9 (1:20).....	21
図28 SK9出土遺物(1:4).....	22
図29 SK9	23
図30 F5dIII区	23
図31 F5dIV区(1:100).....	24
図32 SK19(1:40).....	24
図33 F5dIV区・V区の遺構.....	25
図34 F5dV区 (1:100).....	25
図35 F5dVI区(1:100).....	26
図36 SK28(1:20).....	26
図37 SK28出土遺物(1:4)	27
図38 F5dVI区の遺構	27
図39 F5dVII区 (1:100).....	28
図40 SD31出土遺物(1:4)	29
図41 SK32(1:40).....	29
図42 SK33(1:40).....	29
図43 F5dVII区・VIII区の遺構.....	30
図44 SK38	31
図45 F5dVII区(1:100).....	31
図46 SK38(1:40).....	31
図47 調査区位置図 (1:1500).....	33
図48 1区全景(北から).....	34
図49 4区調査風景(南から).....	35
図50 1～4区全体図(1:125).....	34

図51	第2セクション図(1:75).....	35
図52	5区台地の落ち際(北から).....	35
図53	5~8区土層堆積状況模式図.....	35
図54	6区調査風景(南から).....	36
図55	6区遺物出土状況.....	36
図56	第1層出土土器(1)(1:3).....	36
図57	第1層出土土器(2)(1:3).....	38
図58	土器出土状況.....	38
図59	磨製石器出土状況	38
図60	第2層出土土器(1)(1:3).....	39
図61	第2層出土土器(2)(1:3).....	40
図62	第2層出土土器(3)(1:3).....	41
図63	第2層出土土器(4)(1:3).....	43
図64	第2層出土有文土器.....	43
図65	第2層出土土器(5)(1:3).....	44
図66	第2層出土土器(6)(1:3).....	45
図67	第2層出土土器(7)(1:3).....	46
図68	第2層出土木器(1:4)	47
図69	木器出土状況.....	47
図70	第1・2層出土石器・土製品.....	48
図71	第3層出土土器.....	48
図72	第2セクション.....	49
図73	第3層出土土器(1:3)	50
図74	第1・2層出土石器・土製品(1)(2:3).....	53
図75	第1・2層出土石器・土製品(2)(14:30)	54
図76	1区全景(西から).....	55
図77	1・2区全体図(1:100)	55



1:50,000

図1 板付遺跡調査区位置図 (1:5000)

1 E7a区
2 F5c区
3 G6d区
4 F5e区

I はじめに

板付遺跡昭和59年度・60年度調査の概要

板付道路は、御笠川左岸、沖積平野上に、点々と残る中位段丘面上に立地している。中位段丘II面は、Aso-N火砕流により形成されたもので、板付附近では、標高8mを測る。それを取り囲む沖積地は、標高7m程度で、現河床との比高1~1.5mを測る。台地周辺の沖積地には、縄文時代晚期以降の水田耕作の痕跡が残されている（古川博恭1976）。

昭和59年度の調査（柳沢・杉山編 1985）

昭和59年度の調査は、板付台地西側

沖積地に位置するG7d区の調査により、水田及び溝を検出した。F7f区の調査では台地東縁斜面に立地する弥生時代・古墳時代及び中世の遺構を調査した。加えて、下水道工事に先立つ調査として、E7a区・F5d区の調査を実施し、台地東縁部の状況についての知見を得た。

昭和60年度の調査

前年度に引き続き、下水道工事に先立つ調査として、G6b区、F5e区に調査を実施し、前者によって中央台地東縁部の、後者によって中央台地と北台地の間の鞍部の状況について知ることができた。



図2 板付遺跡の位置 アミは遺跡を示す

調査区	所 在 地	調査対象 面積(実質)	調査期間	検出遺構
板付E7a区	博多区板付5丁目地内	80m ² (80m ²)	84・9・14~ 9・27	水田(古代・弥生前期)・溝(弥生)
F5d区	板付2丁目地内	165m ² (126m ²)	84・10・27~ 85・1・31	水田・土壙(弥生後期・古墳前期・平安)
G6b区	板付2丁目地内	156m ² (135m ²)	85・7・8~ 8・12	小河川(弥生前期)
F5e区	板付2丁目地内	122m ² (122m ²)	85・8・17~ 10・23	柱穴(弥生)

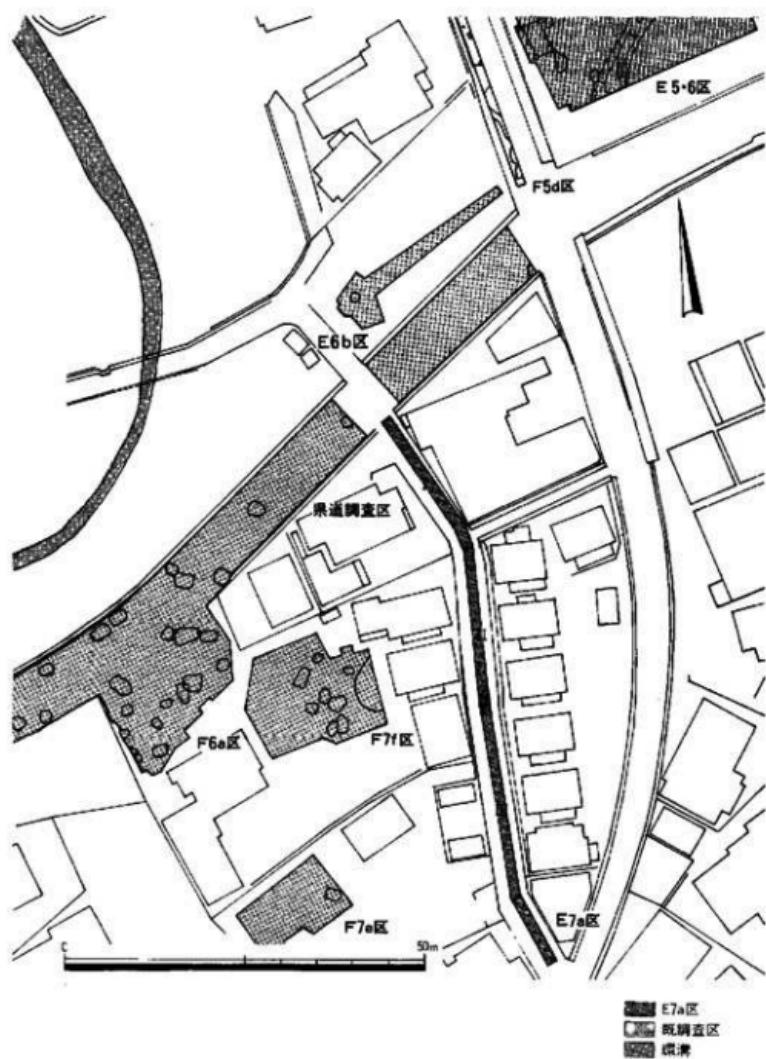


図3 E7a区全体図 (1:800)

II E7a区の調査

II-1 調査区

調査区の位置は、板付道路環溝から南へ30m程のところから始まり、南へ延びる。幅1m、長さ80mほどのトレンチによる調査となった。工事工区を単位として、北から順にI～III区とした。

II-2 E7a I区

全長22mを測る。

道路敷であり、埋設管、側溝工事などにより著しく破壊されている。道路面から0.8～0.9mで地山である八女粘土層となるが、その間は全て擾乱層である。

II-3 E7a II区

全長23mを測る。

北半部は、I区同様の擾乱がみられる。中央部では、擾乱層下に0.4mほどの黒褐色の粘質土があり、漸移層をはさんで鳥栖ローム層となる。このことから、この部分では旧地表面が保存されていることがわかる。この面で浅い小穴を確認した。南半部は、台地縁部の傾斜面となる。南東方向に傾く斜面には、地山である鳥栖ローム・漸移層となるその上に黒褐色土(7層)が、調査区を南へ移ると7層下に灰色砂層(8層)、黒褐色粘土層(9層)の堆積がみられるようになる。

II-4 E7a III区

全長28mを測る。

本地点における模式的な土層の広がりがみられる。



図4 E7a区

調査風景



4層水田と6層整地層

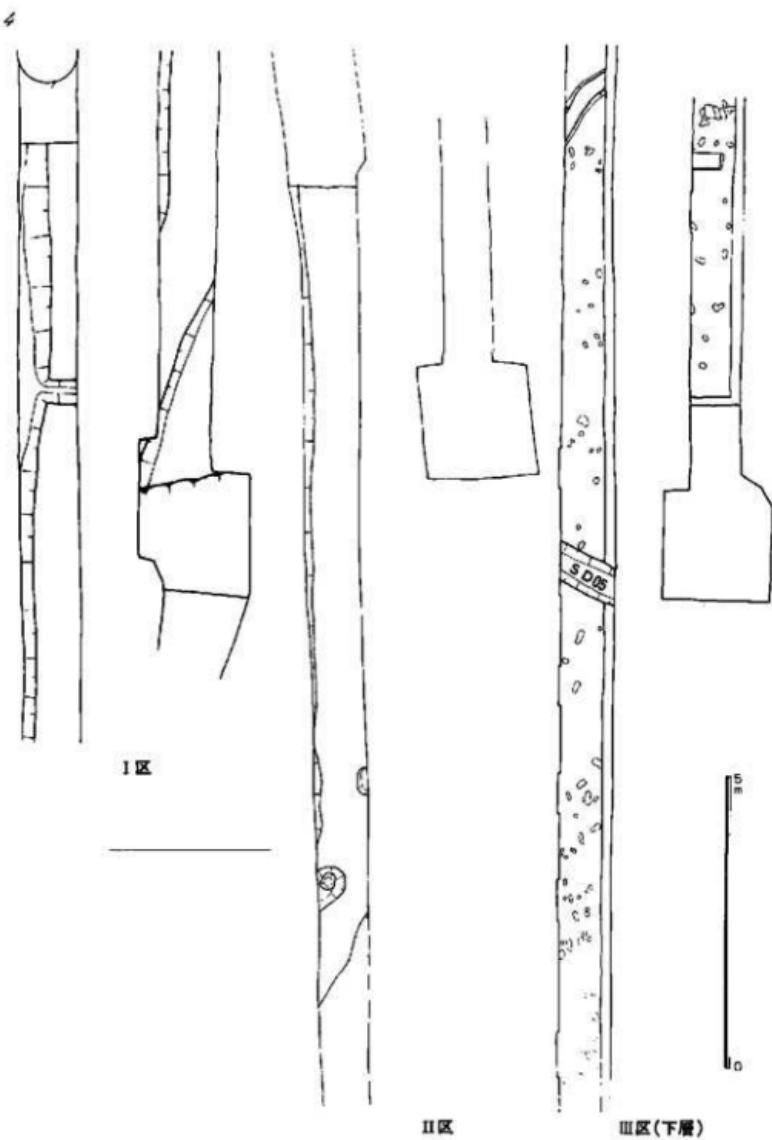


図5 E 7 a区各調査区(1:1000)

土層 挿乱層下に、道路建設時の水田の耕作土が残る。以下、茶褐色砂質土（3層）、灰色砂質土（4層）、そして黒褐色粘土質（5層）となる。5層は水田耕作土とかんがえられる。この下に水田造成時の整地層（6層）が広がっている。7層は軟質の黒褐色土で、土器を主に、多量の遺物を出土している。8層は、黒褐色粘土質の水田耕作土層（9層）を覆う灰色砂層である。10層は、地山である鳥栖ローム層に載る黑色粘土である。

遺構は、各部から検出された。以下に述べる。

5層水田

田面上に砂の堆積はないが、4層との分離は容易であった。遺物としては、弥生土器が殆どであるが、最も新しい資料として古代末の土師器等含まれている。水田は、整地層（6層）上に造成されたものとみられるが、その整地層は、7層上に黒褐色砂土と多量の土器片を敷き詰めたような状態を呈している。遺物の殆どは弥生土器であるが、白磁碗、瓦器碗等を含んでおり、5層水田の造成が古代末以降であることが考えられる。

溝 SD05

8層上面から東西方向に走るもので、断面箱形を呈し、幅0.9m、深さ0.8mを測る。覆土は黒色粘土である。中期前葉の弥生土器が出土している。

9層水田

8層に覆われており、東西方向の畦畔、足跡が遺存する。耕土にあたる9層中に、夜臼式から板付IIa式に至る時期の遺物を含んでいる。9層水田の田面は、北はIII区北端から、南は調査区外へと延びている。尚、上位の8層からの出土遺物には板付IIb式に至る時期のものが含まれている。



図6 E 7a III区

土層（北から）



III区9層水田（北から）

II-5 E7a区出土遺物

以上各区の遺構、層から出土した遺物は、殆どが二次的な移動の結果のものである。このうち、5層水田造成の時期を示唆するものとして1・2がある。共に黒色土器であり、1は内外面黒色、2は内面黒色である。1は底部の大破片で、磨滅が著しい。2は底部のみの破片である。

3～6は、8層出土土器のうち、最も新しい時期を示すと考えられる資料である。3・6は甕底部破片で、3は外面赤褐色、内面黄灰色を呈す。6は外面紫褐色、内面黒灰色を呈す。4・5は甕口縁部小破片である。4は内外面黄灰色、5は外面黒灰色、内面灰褐色を呈す。何れも径1～3mmの砂粒を含んでいる。以上から、中期前葉の時期が8層については考えられる。

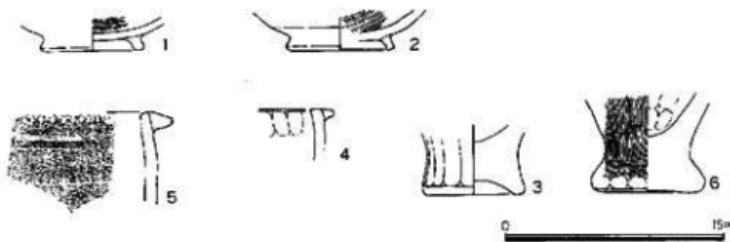


図7 E7a区出土遺物 (1:4)

II-6 小 結

E7a区の調査により、図3に示すごとく、従来考えられていたものより台地の東縁部が、より大きく湾入しており、その部分で水田を検出することが出来た。

その水田は、概報に述べられたように、E5・6区、E5b区と同様なありかたを示し、古代と弥生時代との2面のそれが認められた。但し、その水田面の高度を考えると、地点間の差があり、あるいは、段状の水田造成も考えられようか。

III F5d区の調査

III-1 F5d区の調査

F5d区は、板付遺跡環溝の東50mの台地東辺に沿う道路上の地点である。調査は工事区域延長165mのうち、126mについて行った。調査区の幅は、管塗設部で1m余りを測る。調査は北端から始め、工事工期との調整上、断続的に3回に分けて行い、それぞれの工区を、人孔等により細分して8区画とし、I～VII区の調査区を設定した。

調査は、I区を昭和59年10月27日に開始し、VII区の昭和60年1月31日をもって終了した。

遺物は、容積約26g入りのコンテナにして、200箱余りが出土した。但しその大部分は、2層とする整地層あるいは、3層とする水成かとみられる砂層とに包含されていたもので、前者3にたいして後者2の割合を示す。また、この2層出土遺物で全体の4/5をしめている。ただ、今回そうした大部分の遺物については、呈示しない。それは後述するように、これらの層の形成あるいは性格を直接示すものではないからである。

土層について

調査区全体に分布する層と、調査区毎に断続するものとがみられる。前者について簡単に説明しておく、後者を含んだ詳細については、各区毎に説明を加えることにする。



図8 F5d区調査風景

8

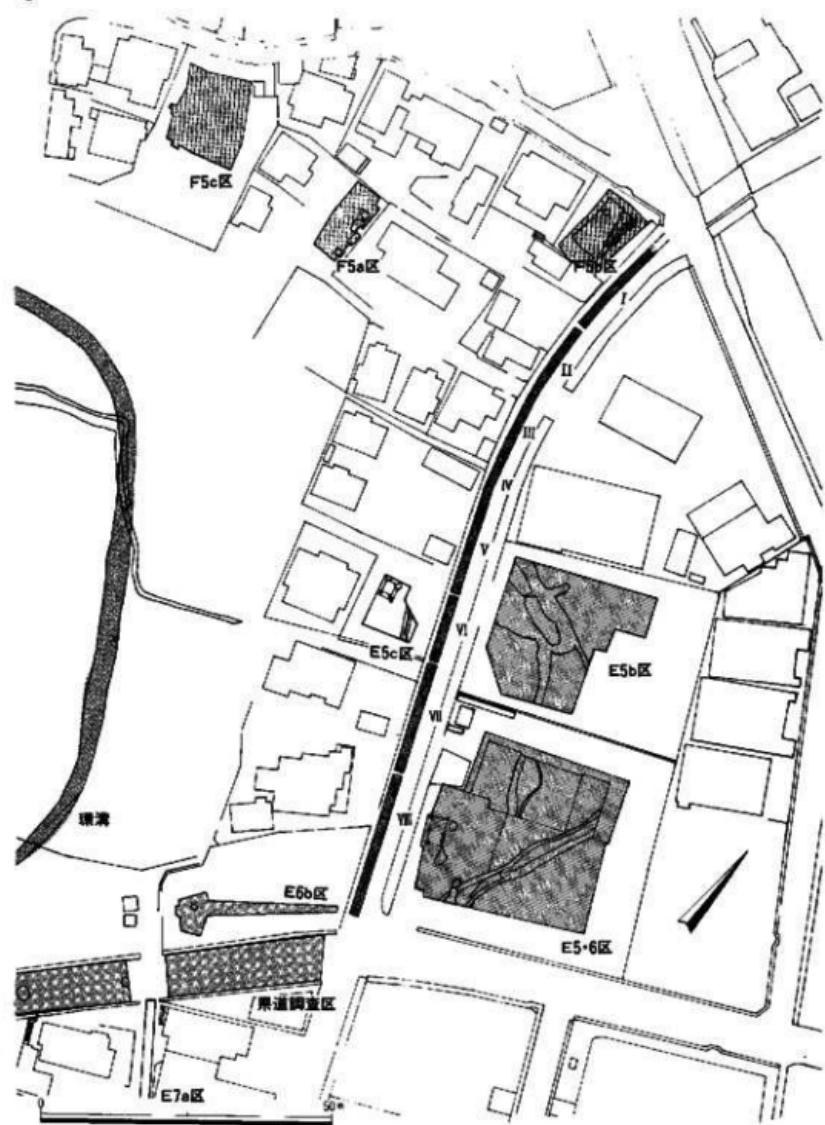


図9 F5d区全体図 (1:1000)

- F5d区
- 国道同里区
- 环湖

1層

現用道路路床・その建設時埋め立てられた水田耕土・床土である。

2層（注1）

灰褐色から黒褐色へ漸移的に変化する粘土層である。灰褐色で硬い上部(2a層)と、黒褐色で水分を多く含み軟らかい下部(2d層)とに分けて捉えることができる。遺物は2b層から大量に出土している。その出土状況をみると、殆どが弥生時代中期・後期の土器であり、一部では、完形のまま投棄された様子が窺えた。

ところで、2層より下位にある遺構SK9は、明らかに古墳時代のものである。又、2層に掘りこまれた遺構SK1は平安時代を考えることができ、2層形成時期が限定される。加えて、層中に流水を示す砂の薄層等含まれず略一様であること、縦に入るクラックにより、薄く剥げて崩落してゆくこと等、ある一時期に形成されたものと考えることができ、その営力としては人的なものが考えられよう。ただ、遺物の出土状況からすると完形のままのものが検出されるところもあり、疑問な点も残る。

3層（注2）

砂、シルト、粘土の薄層から成る層で、灰褐色あるいは褐色を呈す。遺物は、2層同様大量に出土している。いわば敷き詰めたような状況を呈するところもある。水成と考えられる。2層、下位の層と不整合に重なる。

6層（注3）

黒色粘土である。水分の量によるものか、硬いところと、軟らかいところがある。遺物の出土は極く少量である。下位の地山に漸移し、旧表土層かと思われる。

地山

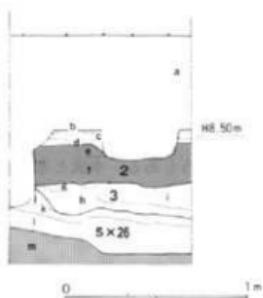
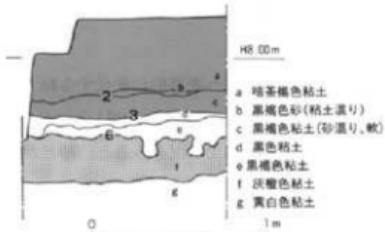
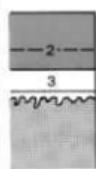
調査区間で異なる部分がある。大きく分けると、鳥柄ローム・八女粘土より成る部分と、水成の粘土から成る部分である。

以下に、各地の状況と、出土遺物・遺構について述べる。

注) 1 ここで2層とする層は、調査記録時には、調査区を表わす記号と組み合わせて2桁で12層と表示したものである。

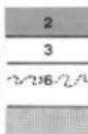
注) 2 3層とするのは、調査記録時、13層、23層、53層、63層、73層としたものである。

注) 3 6層とするのは、調査記録時、16層、26層、36層、65層としていたものが相当する。



Soil profile diagram H8.50m showing layers 2 and 3. The legend indicates:

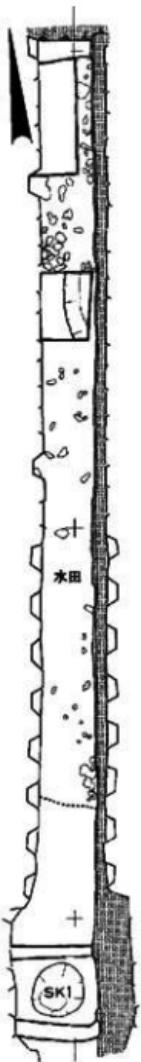
- a 盛土・擾乱
- b 喀茶褐色粘土
- c // 底土
- d 黑灰色粘土
- e 喀茶灰色粘土
- f // (カルト質)
- g 喀茶褐色粘土(粗砂
混り、土器を多量に
含む)
- h 喀茶灰色粘土
- i 喀茶色細砂
- j 明褐色砂
- k 明褐色砂・明灰色
粘土の互層
- l 黑褐色粘土(砂混り)
- m 黑色粘土



II区(中央部南から) II区(南部北から)
V区(南壁北から) IV区(南端部北から)
VII区(中央部南から)

数字は各層を示す

III-2 F5d I区

図11 F5d I区
(1:100)

I区の状況

F5d地点北端にあたる。延長17mで、北端以北は、先行工事により掘削されている。

土層の示す状況は、南半部では本地点の一般的なありかたを示すが、北半部では、地山の八女粘土が急激におちてゆき、それを黒色粘土（6層）が厚く覆う。この粘土層は、台地周辺に縄文時代以降生成したとされるもの（古川 1976）と考えられる。6層の上位に青灰色シルト（15層）が厚さ0.1mほどみられ、酸化鉄、マンガン斑がみられる。5層は青灰色砂層（14層）に覆われており、これによって15層上面に足跡は保存されている。これらから15層が水田であることがわかる。14層、15層とともにI区中央部付近までひろがる。

3層は、茶灰色粘土層で、上面に遺物が集中的に出土する。出土状況、高さから3層とした。I区南半部では、5層、3層、2層がそれぞれ不整合に重なっているのが観察された。それらは全体に東の沖積地に向かって傾斜している。

I区の遺構と遺物

水田 土層の項で述べたように、15層を耕作土とする。水田面は、I区北端から3/4ほどまでで、それより南は、印表上と考えられる6層上面となる、この間に明確な境界は観察されなかった。

土壤 SK1 平面で不整な円形を呈し、径0.9mを測る。断面は深鉢状で、深さ0.6mを測る。覆土は、暗灰褐色軟質の粘土で、上部に最も厚い部分で10cm程度の、恐らく薬灰とみられる灰の層を挟んでいる。本遺構は、2層掘り下げ中に検出したもので、少なくとも2b層の形成時期よりも新しい。

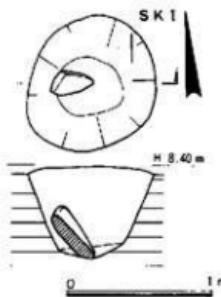
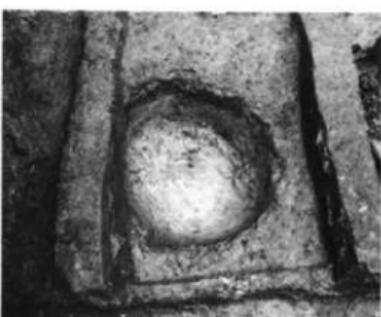


図12 SK1 (1:40)



図13 F5d I区の遺構 13・14層水田（南から）



SK1 (東から)

SK1出土遺物 遺物は、覆土中より出土した。一括投棄したような状態は、認められなかった。出土資料はコンテナ 1/2箱で、其の半ば以上は弥生土器である。他は、この以降の時期を示すと考えられる資料である。比較的下部で出土した。それを以下に示す。

21は土師器高台付碗で、口径15.4cmを測る。胎土に僅かの小砂粒を含み、内外面黄白色を呈す。口縁の1/3程を欠いている。土師器高台付碗は、他に5個体分の破片がある。

22は、黒色土器である。内面のみ焼べる。口径14.7cmを測る。胎土には砂粒を含み、外面黄白色、内面黒色を呈す。焼成は良好で、1/2ほど遺存している。

23は甕である。底部を欠く。1/3程の遺存である。復原口径21cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、外面黄灰色乃至赤灰色、内面暗褐色乃至黄褐色を呈す。焼成は良好である。内外面とも撫でにより調整する。接合しないが同一個体とみられる胴部破片があり、その外面には、格子目叩きが観察される。底部付近を除く外面には煤が厚く付着している。

24は、須恵質の壺である。肩部以下の部分で1/3程の遺存である。胎土に砂粒を含み、外面青灰色乃至灰色、内面灰褐色を呈す。やや粉っぽい外面を格子目の叩きで調整しており、内面にはそれの当て具によるものか、浅い凹みがみられる。外面底部付近は笠削りを行い、外底面は撫でにより調整している。

25は丸瓦である。完存する。胎土に粗砂粒を多く含んで緻密である。内外面ともに灰白色を呈す。内面には布目压痕を残し、外面は格子目叩き後、縱方向に笠削りを行っている。叩き具による、陽刻文字が残される。「佐」と読める。

26は平瓦で側邊の一部を含む破片である。胎土に粗砂粒を多量に含み、上面黄褐色乃至茶褐色、下面茶褐色乃至黒褐色を呈す。上面に布压痕、下面には格子目叩き痕が残る。

以上のうち、口縁端部を明瞭に外反させる土師器碗、内面を塗す黒色土器から、10世紀後半を考えることができるかと思う。(森田 勉1983)

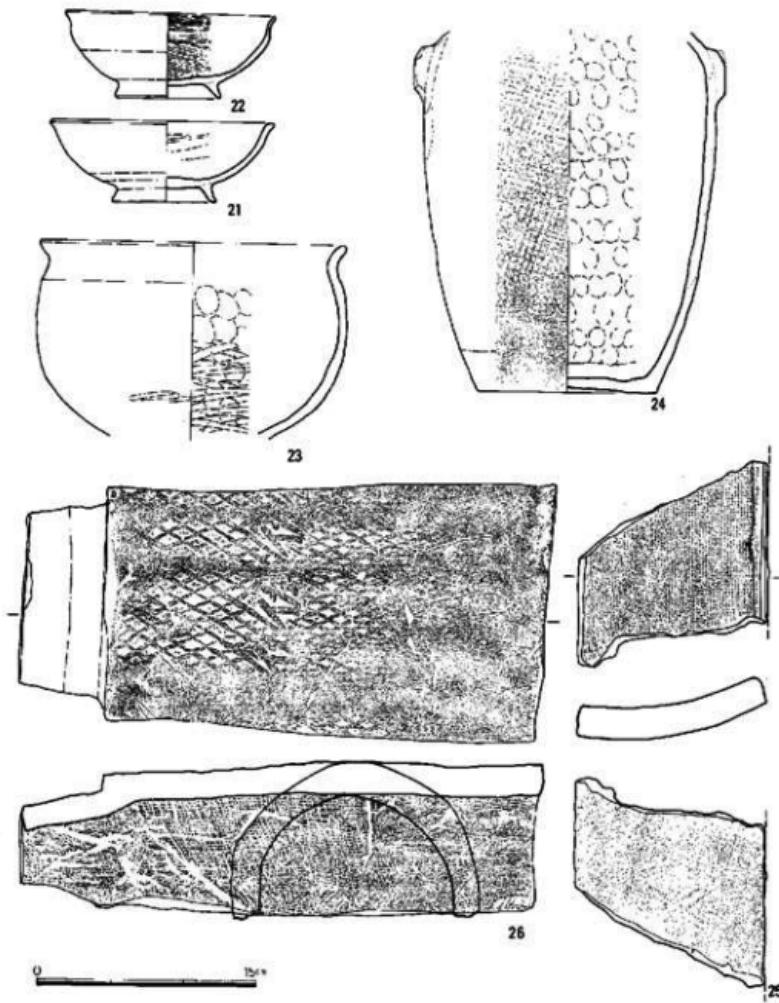


図14 SK 1出土遺物 (1:4)

III-3 F5d地点 II区

II区の状況



延長16mを測る。

集中して土壌が検出された。

土層 全体に2層がひろがっている。2層は2a層と2b層とに分離できる。地山は、橙色粘土である。II区北半部では、2層が地山に直接のるが、南半部では2層の下に3層、6層のひろがりがある。3層は暗褐色砂を部分的に含んでおり、これも3層に含めるべきかも知れない。

6層は、黒褐色粘土で、地山との境界は不明瞭である。

II区の遺構と遺物

遺構を検出したのは、いずれも地山面においてである。II区南端ちかくに、SK3・SK4・SK5・SK6・SK7・SK8が集中し、中央部にSK2が位置している。

土壌 SK2 調査区幅を越えて広がる。調査範囲内での長さ2.7m、深さ1.4mを測る。平面形状からは、2基の土壌の重複したものとみえるが、調査時には、確認できなかった。覆土は、上部に八女粘土塊を含む暗灰色粘土層、下部に軟質の黒褐色粘土層が堆積している。何れもレンズ状の堆積を示す。多量の木片が含まれていた。

SK2出土遺物 遺物は、覆土中で検出された、総量はコンテナ4箱程が出土した。以下に主なものを抽出説明する。

図18に壺を示す。小形の壺(42)と、大形の壺とがある。後者の口縁部は、いずれも内屈し、外面には稜ができるが、それ以上の口縁部が内湾しながら内屈するものと、外反気味に内屈するものとがある。更に後者には、口縁端部をつまみ上げたようにするものがある。肩部まで残る資料によれば、頸部付け根には大形壺では、断面三角形の突帯がみられる。肩部や下方には断面三角形の突帯1条又は2条が付されるものがある。44は底面がやや丸みをもっている。

図15 F5d II区
(1:100)

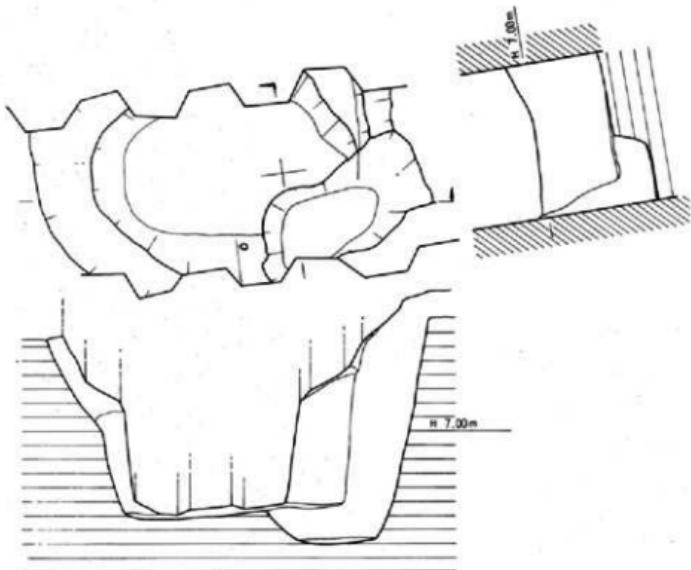


図16 SK2 (1:40)

図19に表を示す(31・37・43・45)。比較的小形のものと、大形のものとがある。大形のものは、口縁部径より胴部径が大きく、口縁に明確な墙面を作りだしている。胎土に砂粒を含み、黄灰色、暗灰色を呈す。いずれも大破片である。

41・32・38は鉢である。口縁が外屈するが、その程度は種々ある。口縁端面を作り出している。胎土に砂粒を含み、黄灰色乃至灰白色を呈す。何れも破片資料である。30・29・27・28は

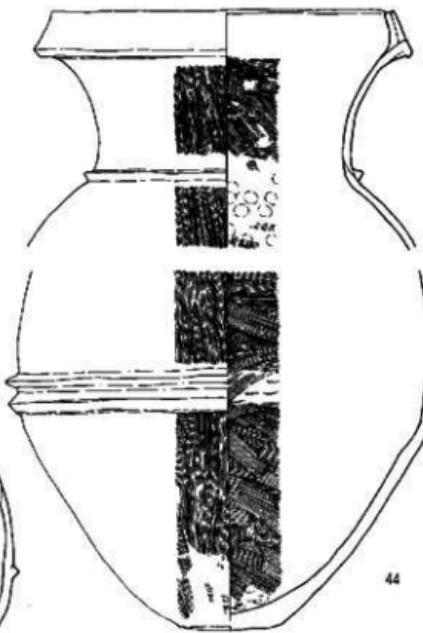
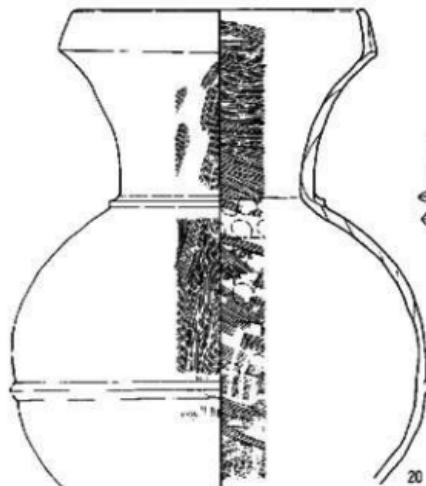
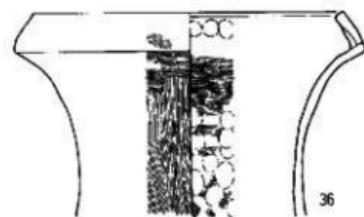
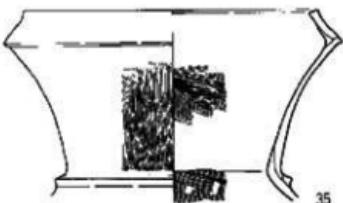
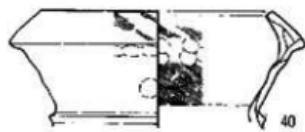
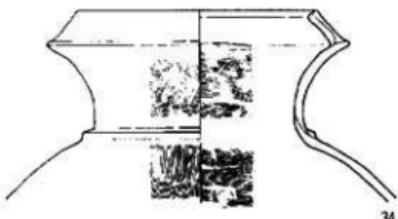
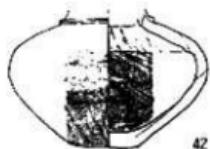


図17 F 5 d II区

II区全景（北から）

SK2 (南から)

16



0 15cm

図18 SK 2出土遺物 1 (1:4)

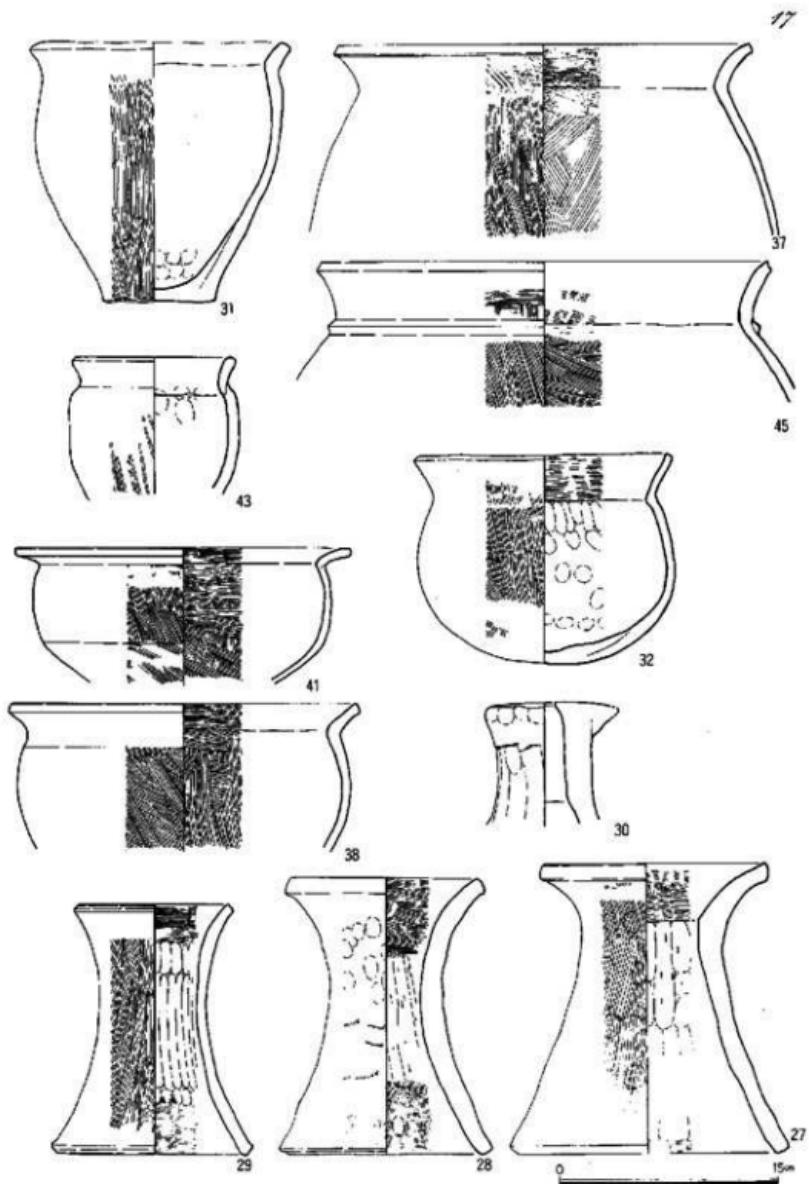


図19 SK2出土遺物 2 (1:4)

器台である。いわゆる苔形器台である30と、中ほどがくびれた円筒形を呈するそれ以外の資料とに分けられる。後者のうち、27のみは屈曲部内面に縫をもつていて。

いずれも胎土に砂粒を含み、30・27は黄灰色乃至灰白色を、29・28は黄褐色乃至黄橙色を呈す。

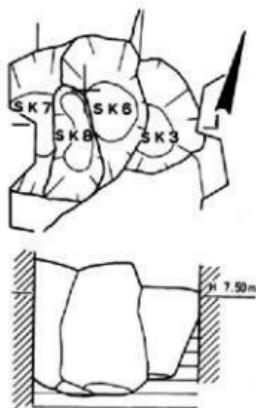


図20 SK3・6・7・8 (1:40)

土壤 SK3・SK6・SK7・SK8 いつれも平面橢円形に見える土壤である。互いに重複しており、その切り合いから、SK8、SK7、SK6、SK3の順に古いことが知られる。

SK3 長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.6mを測る。覆土は水分が多く軟質の暗茶褐色粘土がレンズ状に堆積しており、木片等を多く含んでいる。遺物は弥生土器片が殆どで、総量はコンテナで1/2程が出土した。

SK3出土遺物 壺及び甕は小破片がみられるだけである(60・61)。53・54は鉢である。胎土に砂粒を多く含み、黄灰色を呈す。

SK6 平面橢円形、断面深い台形状を呈する。長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.7mを測る。覆土は砂の多く混じった暗褐色粘土層がレンズ状に堆積する。遺物は少量の弥生土器が覆土中より出土した。

SK7 平面橢円形で深い鉢状の断面形を呈す。覆土は、暗褐色砂を主に、レンズ状の堆積を示す。遺物は極く少量の弥生土器が覆土中から出土した。弥生時代後期の資料である。

SK8 原状は復原し得ない。深い鉢状の断面形と思われる。



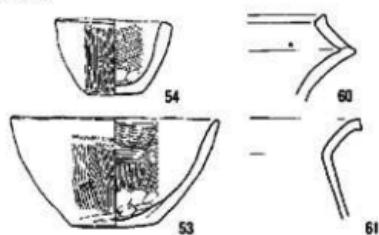
図21 F 5 d II区の遺構



SK3・SK6・SK7・SK8 (南から)

S K 3

19



S K 4

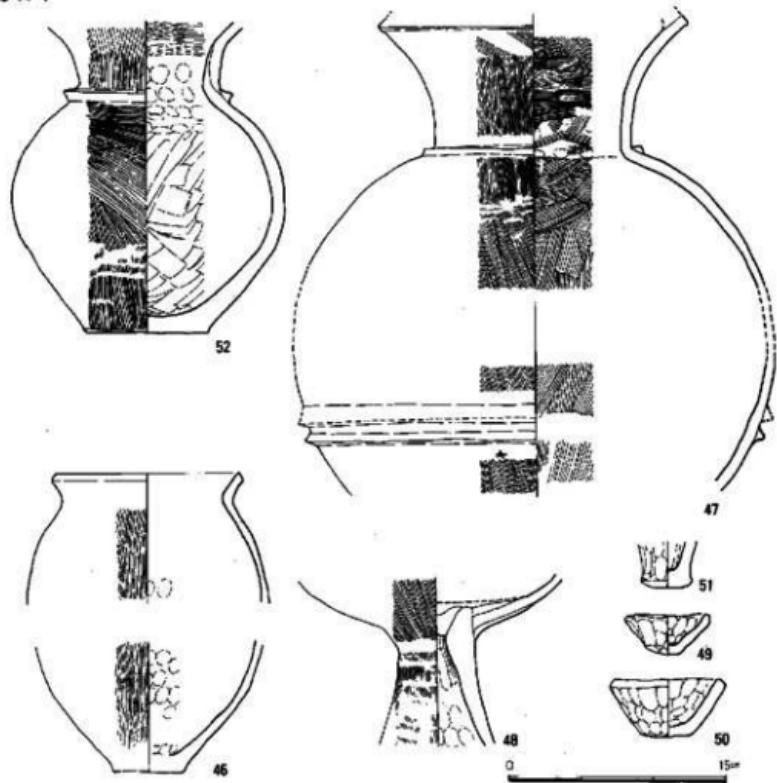


図22 SK 3・SK 4出土遺物 (1:4)

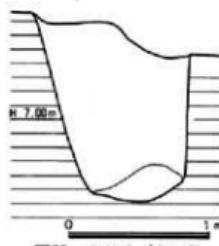
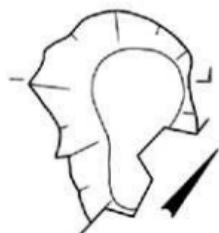


図23 SK4 (1:40)

土壤 SK4 SK3-SK4と重複し、そのいずれよりも古い土壌である。平面不整な橢円形、断面深い逆台形状を呈す。長さ1.4m、幅1.0m、深さ1.4mを測る。覆土は暗褐色シルトを主とするレンズ状の堆積である。遺物は、弥生時代中期から後期にかけての土器を主に、コンテナ 1/2程が出土した。以下に出土遺物を示し説明する。

SK4出土遺物 52・47は壺である。52は平底、47は口縁部の屈曲部以上を欠いている。胴部下半に断面三角形の突窓を2条もつ。底部は欠損して不明である。ともに胎土に砂粒を含み、黄白色を呈す。46は甕で、口縁部は丸みをもって外反する。底部は平底である。胎土に砂粒を含む。明褐色を呈す。大破片である。48は高环である。胎土に砂粒を含み、黄灰色を呈す。

49・50・51は小形手捏ねの土器である。鉢形を呈する49・50と、より深い形状を呈する51とがある。胎土に砂粒を含み、黄灰色或は灰色を呈する。

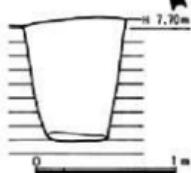
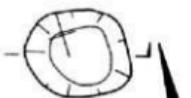


図24 SK5 (1:40)

土壤 SK5 SK4より新しい土壌である。平面不整な円形を呈し、径0.6m、深さ0.7mを測る。覆土は黒褐色粘土を主とする。全体に軟らかく、砂を混じえる。遺物は少量が覆土中より散漫に出土した。



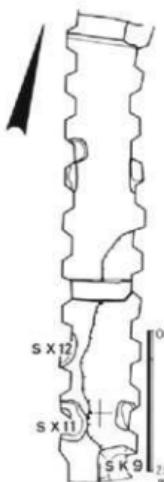
図25 F5 d II区の遺構



SK4 (西から)

SK5 (東から)

III-4 F5d III区

図26 F5d III区
(1:100)

III区の状況

III区は延長8mを測る。

III区の土層 2層が厚いところで0.4m残っている。以下は、3層 黒色粘土層が一部にみられる他は、地山で、褐色粘土更に黄乃至灰色 粘土(八女粘土)という変化を示す。

2層を除去した面で遺構を検出した。IV区との境界部で検出したSK9の他に、柱穴の可能性が考えられる小穴SX11、SX12がある。

III区の遺構と遺物

以下、個々の遺構とその遺物について述べる。

土壤 SK9 III区とIV区にまたがり、一部は調査区矢板外へ延びる。現況では、平面不整な楕円形、断面は深い鉢状を呈する。長さ1.0m、深さ0.6mを測る。覆土は、黒褐色で水分を多く含んで軟質の粘土であるが、これと2層の下部土との境界は、肉眼による限り判然としない。覆土中から一括投棄されたかのような状態で土師器が検出された。

SK9出土遺物

2・9・8・7は高环である。环部は口縁端が外反するものとまっすぐ外行するものとがある。又、脚部も、裾部との境が明瞭に屈曲するものと、比較的なだらかに移りかねるものとがある。但し両者とも、屈曲部内面には、稜が残されている。胎土は、9の他は、比較的砂粒が少ない。9は黄灰色、9・7が黄橙色、8が灰白色をそれぞれ呈す。

11・16・1・3は小形丸底の壺である。11は二重口縁の、他はまっすぐ外向する口縁を有するもの(3)と、やや内湾外向気味にたちあがる口縁を有するもの(16・1)とに分かれる。11のみ外面全体に範による調整を行うが、他は口縁部外面のはかは、刷毛目調整が行われる。胎土

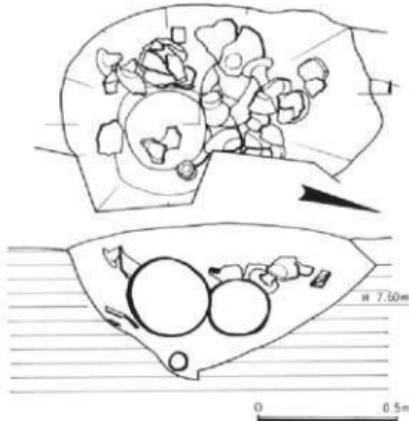


図27 SK9 (1:20)

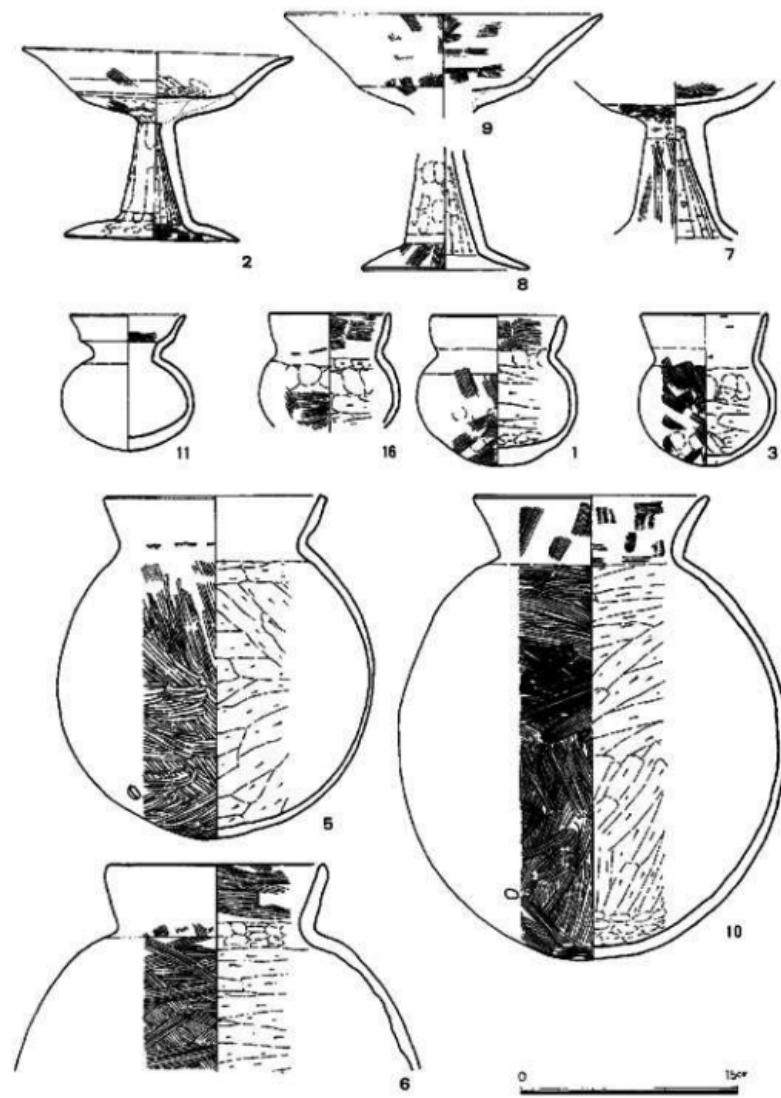


图28 SK 9出土遗物 (1:4)



図29 SK9

(III区北から)



(IV区南から)

には細砂粒を多く含んで、11は外面黄橙色、16・1・3は黄灰色乃至は、灰褐色を呈す。

5・10・6は甕である。長円形乃至橢円形の体部をもって、内湾気味に外向するもの(5・6)と反するもの(10)とがあるようにみえる。完存あるいは全形を知ることのできる資料10には、底部近くの胴部に、焼成後外方から穿孔が行われている。胎土については、5以外は粗砂粒を多く含んでいる。5は黄灰色、10は黄橙色、6は灰白色を呈する。何れの資料にも煤の付着が顕著で、5は口縁端まで、10・6は体部上半部まで及んでいる。

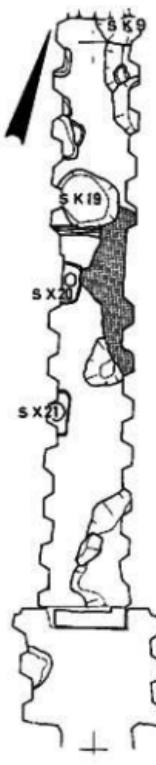
小穴 SX11 現況不整な長方形状を呈す。柱痕跡とみえる部分を認めた。覆土は黒褐色粘土に八女粘土塊を多量に含んでいる。長さ0.7mを測る。

小穴 SX12 現状平面形橢円形を呈する。長さ0.6m、深さ0.4mを測る。



図30 F5d III区 (南から)

III-5 F5d IV区

図31 F5d IV区
(1:100)

IV区の状況

IV区は、延長13mを測る。

IV区の土層 2層上面は、擾乱の内部部分で地表下1.1m程のところにある。2a層、2b層に分けられる。2層は直接地山にのっている。地山は橙色粘土であり。旧表土、漸移層部分ともにみられない。IV区南半部では、東へ向かう小さな段落ちがみられる。

2層を除却した面で遺構が検出された。土壤及び小穴あるいは不整な落ち込みである。

以下、個々の遺構について述べる。

IV区の遺構と遺物

土壤 SK9 南半部がIV区にかかった状態で検出された。

土壤 SK19 平面不整な円形、断面袋状を呈する。長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。

小穴 SX16 平面稍円形とみえる。長さ0.5m、深さ0.2mを測る。遺物は弥生土器と見られる少量の土器片が出土している。

小穴 SX20 平面隅丸の長方形とみえる。断面は逆台形状で、長さ0.7m、深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色粘土で、八女粘土塊が混じる。平面では柱痕跡と思われる変化を認めたが、断面では不明であった。遺物は少量の弥生土器片が出土している。そのうち時期を考えることのできる資料としては、後期の器台とみえるものがある。

小穴 SX21 平面隅丸の長方形とみえる。断面は鉢状を呈する。長さ0.8m、深さ0.3mを測る。覆土は、底近くに八女粘土塊を顯著に含む黒褐色粘土である。平面で柱痕跡を検出したが、それは断面では、ややすれて観察される。遺物として、小量の土器片が出土した。うち1点は、古墳時代前期の土師器かと思われる。

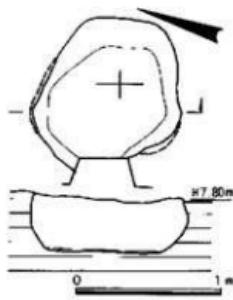


図32 SK19 (1:40)

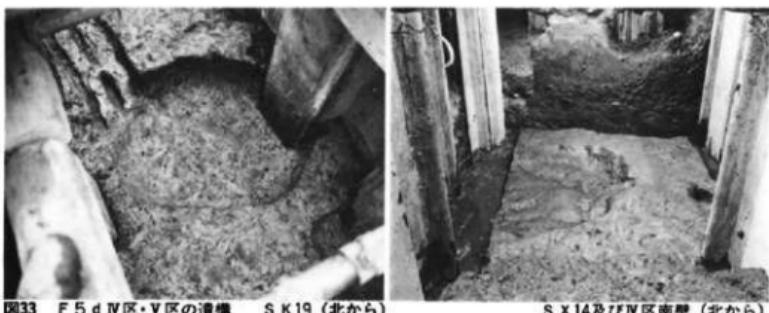


図33 F 5 d IV区・V区の遺構 S K19 (北から)

S X14及びIV区南壁 (北から)

III-6 F 5 d V区

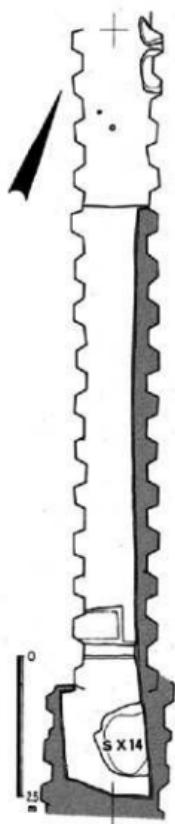


図34 F 5 d V区(1:100)

V区の状況

V区は全長14mを測る。

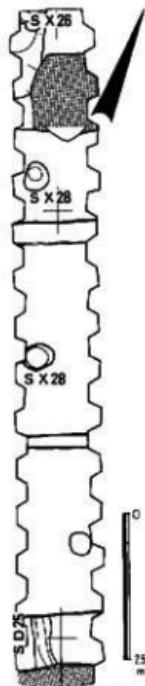
V区の土層 地山粘土層が、次第に低くなつてゆき、それを埋めるかのように黒色粘土の堆積がみられるようになる。これらの上に3層の堆積、更に2層がひろがつてゐる。

造構は、杭が確認された部分のあつたほか、不整な土壤状の落ち込みSX14、統くVI区で確認しV区へも延びると考えられるSX 26があげられる。

V区の遺構と遺物

不整な土壤状の落ち込み SX14 V区南端部2層掘り下げ中に検出したが、湧水のため平面形状を捉えることができず。2層除去、排水処置後に確認することができた。為に遺存部は極く浅いものとなつた。又、平面形状も不整である。覆土は褐色味を帯びた灰色粘土である。遺物は上記状況であったので、2層出土のものと分離することができなかつた。この部分の遺物として布目の残る平瓦破片があるが、これがSX14出土の可能性がある。

III-7 F5d VI区

図35 F5d VI区
(1:100)

VI区の状況

VI区は延長12mを測る。

VI区の土層 2b層は暗茶褐色の粘土であり、遺物を多量に含んでいる。その下面是、東への緩い傾斜面となるようである。3層が続く。3層は、粘土、砂等の薄層により成っていて、明らかに流水による堆積である。これによるものであろうが、下面是、凹凸が著しい。3層下には6層が残存し、漸移層を経て地山は暗黄褐色乃至淡灰色粘土となる。これは、VI区中央部付近での状況で、南端部になると、6層の下は八女粘土層となる。

ところで、V区とVI区との境界部に落ち込みがあり、これをSX26としたが、その部分では黒褐色粘土層の堆積が厚く、地山粘土層の下へもぐってしまっていた。こういった堆積状況を考えると、V区からVIにかけてさほど深くはないが、埋没谷が存在することを考えられる。

遺構は、杭の一群及び小穴が3層下で検出された。以下に遺構と遺物について述べる。

VI区の遺構と遺物

溝状の落ち込み SD25 2層下、3層上面で検出した。覆土は2b層と同一である。但し南端部の土層断面では、観察できない、2b層の下面の凹凸かも知れない。遺物はコンテナ2/3程出土した。すべて弥生土器であるが、全形の判るものはない。

土壌状の落ち込み SX26 V区とVI区とにまたがって検出された。調査区西壁外に伸びる。平面形は梢円形を呈しているが、底面の凹凸からすると、重複成は全く自然のものである可能性が考えられる。覆土は、黒褐色粘土で、砂塊を挟んでいる。木片を多く含んでもいる。上半部東側では、流水による堆積の状況を明瞭に示す、暗褐色砂、黒褐色粘土の薄層がみられる。遺物は覆土中から散漫に出土した。コンテナで1/2程の量である。全形を知る資料ではないが、最も新しいもので弥生時代後期の底底部、器台等がある。

小穴 SX28 平面不整な梢円形を呈し、断面は逆台形状を

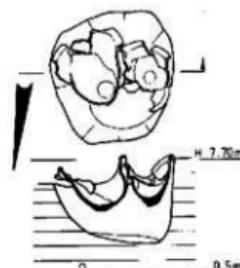


図36 S K28 (1:20)

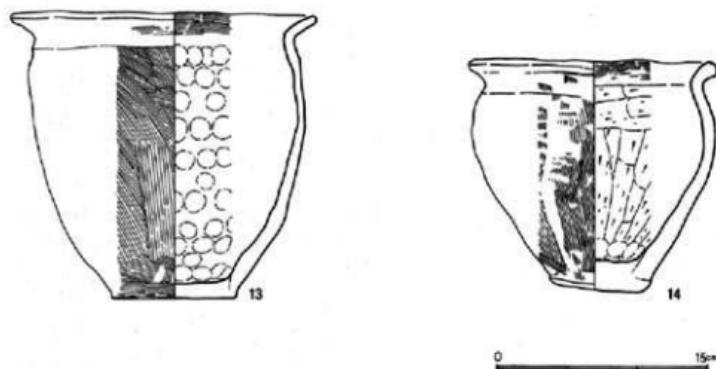


図37 SX28出土遺物 (1:4)

呈す。長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。覆土中に一括投棄されたような状態で甕2個体の出土があった。

SX28出土遺物 13・14は甕である。体部上端が強くすぼまり、屈曲して口縁部となる。13は外底面にも刷毛目調整を行なっている。共に胎土に砂粒を多く含み、灰白色あるいは黄灰色を呈す。

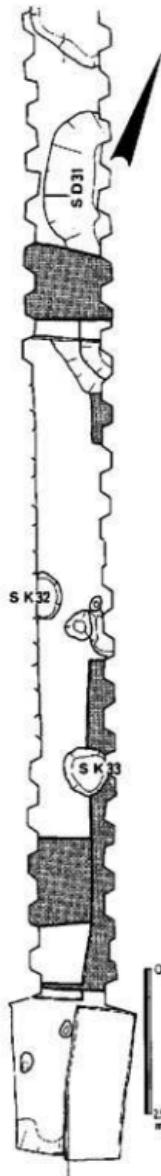
小穴 SX29 平面不整な橢円形状を呈す。長さ0.6m、深さ0.2mを測る。遺物は小量の弔生土器片が出土した。最も新しい資料として後期の甕の破片がある。



図38 F 5 d VI区の遺構 S D25 (北から)

S X28 (東から)

III-8 F5d VII区



VII区の状況

VII区は延長20mを測る。

VII区の土層 上から2層、3層、6層、地山の暗褐色乃至暗黄褐色砂混じり粘土が標準的な在りかたである。但しIV区南端部では地山は急激に高くなるが、その部分では、鳥栖ロームとそれを覆う黒色粘土が地山層となっている。つまり、一旦高くなった八女粘土面は、ふたたび下がってゆき、其の部分を沖積層が埋め、南端で台地の立ちあがりに至る、というような模式図が考えられるのではないか。

VII区の遺構及び遺物

溝状の遺構 SD31 調査区東壁外へ続く。平面形状は全く不明であるが、堆積の状況から考えて溝の状態を推定した。覆土は、上から粘土、シルト質の粘土、砂、シルトの互層、塊状になった黒褐色粘土の順にみられ、次第に水量がへってゆく過程での埋没という状況を考えることができよう。またVII区端にみられる不整形の落ち込みが、砂あるいはシルトの薄層により埋められていることからすると、SD31という流れではなく、より広汎な面積を覆う流れにより、あるいはえぐられ、あるいは埋積されたことの結果ともみることができよう。ここで上層断面を見るかぎり、SD31はVII区において3層よりも後のものである事になるということが注意される。

SD31 出土遺物 遺物は、覆土中から散漫に出土した。総量はコンテナ1箱ほどである。57・56は壺である。大きさは異なるが、ともに袋状に内湾する口縁部をもつ。胎土に砂粒を多く含み、黄灰色を呈する。

58は高环である。完存するものではないが全形を知り得る。胎土に細砂を多量に含んでおり、内外面とも明褐色を呈する。外面及び口縁部内面には赤色顔料が塗布されていたことがわかる。脚部の穿孔は乾燥前に行われている。形状、胎土、焼成とともに在地のものでなく、類例は山陽地域に求められる。後期初頭が考えられる。

55は甕である。口縁部形状は不明であるが、他の全形がわかる。台付である。胎土には砂粒を少量含んで、淡黄白色を呈す。

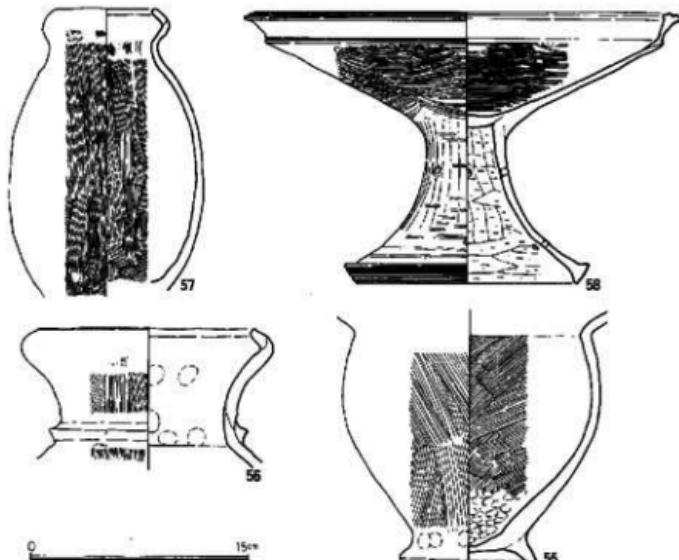
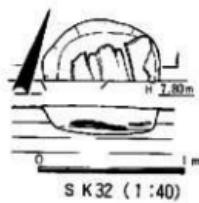
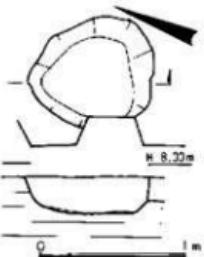


図40 SD31出土遺物 (1:4)

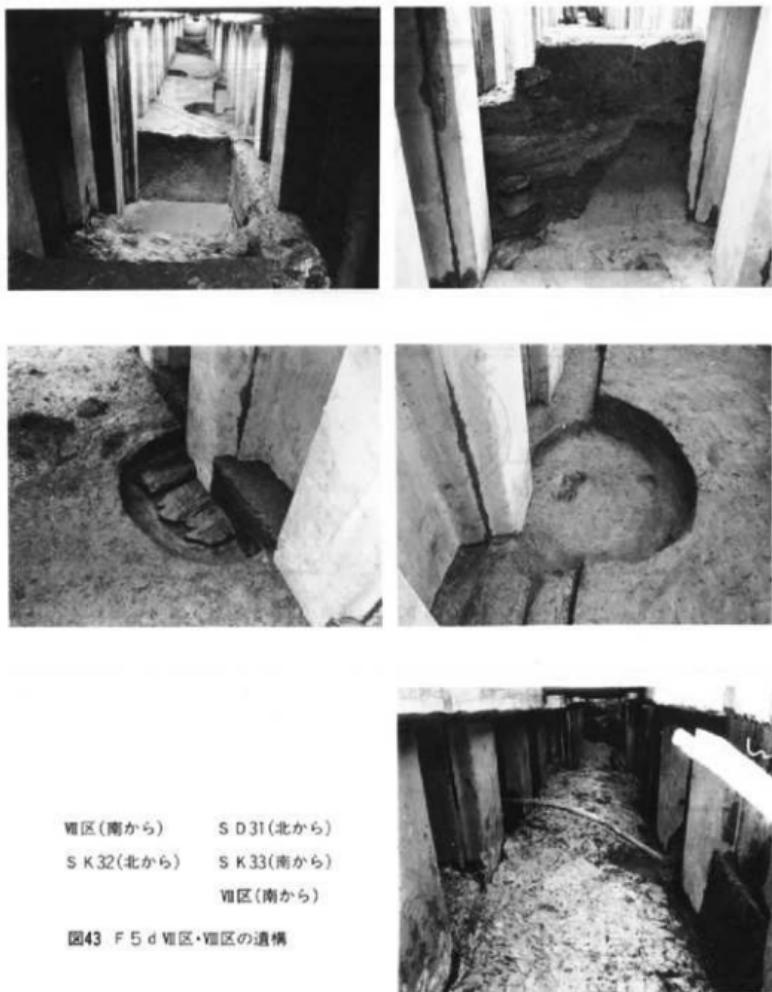


土壤 SK32 平面梢円形、断面浅い逆古形状を呈する。長さ0.8m、深さ0.2mを測る。底面で板材が敷かれたような状態で出土した。広葉樹で、明確な形状はわからない。黒褐色粘土の覆土中から遺物が少量出土している。弥生時代後期までの土器片である。



土壤 SK33 平面不整な四角形、断面鉢状を呈する。計0.8m、深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色粘土である。少量の弥生土器が出上した。

図42 SK33 (1:40)



III-9 F5d VII区

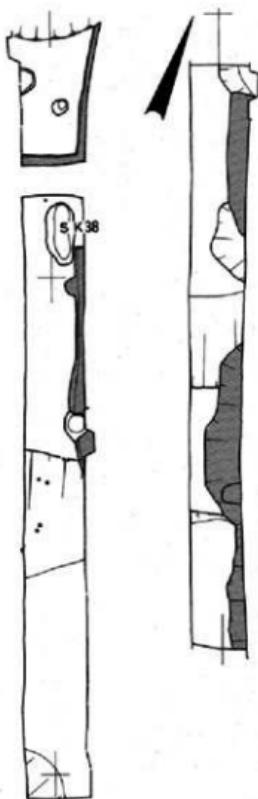


図45 F5d VII区 (1:100)

III区の状況



図44 SK38 (南から)

延長25mを測る。

VII区の土層 2層は見られず、比較的新しい時期の埋め立てによると思われる層下に黒褐色粘土層があり、遺構はその上面で検出された。この黒褐色粘土層は、6層に相当する旧表土層とみられる。以下、暗褐色、暗黄褐色、淡灰青色の粘土層が継ぎ、更にそれの下に橙色の鳥栖ローム層、更に八女粘土層が続く。VII区中央部以南は、削平などにより八女粘土が露出している。

遺構は北部以外では、極く新しい遺物を出土するもの以外は認められない。

VII区の遺構

土壤 SK38 平面長楕円形、断面深鉢状を呈す。長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。覆土は黒褐色粘土である。遺物は少量の弥生土器小片が出土した。

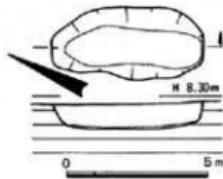


図46 SK38 (1:40)

III-10 小結

F5d区は、板付遺跡台地部の縁辺に沿うトレンチ状の調査区であったために、台地と低地との関係については、明確な資料を得ることが、出来なかった。

調査区は、Ⅶ区を除いて台地から一段下がった部分に当ると考えられる。そこは、水田経営が行なわれる(I区)、又、3層、SX26、SD31等の示すような洪水あるいは増水時の流路となるような場所である一方で、土壤、小穴に示されるような、いわば、水から離れた土地でもあった。そういう状況の変遷について考えてみたい。

F5d区で検出した遺構のうち最も古い時期を示すのは、弥生時代後期に属するSK2・SK3・SK4・SK28等である。これらのうち、明らかに目的別に上器を投入しているのがSX28である。他遺構の性格については、考えるための資料を持ち合わせていないが、II区の一部分に集中・重複して存在していることから、ある共通した性格を持っていたと考えられる。それはともかく、II区の土耕覆土には、植物質の遺存物が多量に含まれ、地下水位の極く高い場所であったことが考えられよう。いま、後期を3区分する考え方たに従えば、壺に端的に示されるところの、其の中葉期が考えられる。これと直接前後する時期の遺構は認められなかった。ただ、後世の客土によると考えられる2層、及び、水流による洗い出しとも考えられる3層それぞれに含まれる、弥生時代中期から後期に至るまでの大量の遺物は、この時期に於ける板付遺跡の集落の継続性と規模とを示唆するものであろう。

隣接するE5区の1号豊穴の存在から考えられる弥生時代後期末を経、III・IV区のSK9に示されるように古墳時代前期に至っても、環境の変化は無かったようである。この後、その開始時期については詳細を説明できる資料を得られないが、次第に河水の影響を受けるようになる。このことは古墳時代以降拡大されたとされる、自然堤防の発達(井関弘太郎 1983)と関連づけることも出来るのではなかろうか。いづれにせよ、それは一回だけのものではなく、Ⅶ区の土層にみられるよう度重なるものであったことが考えられよう。また、こういった状況下、I区14層水田に示されるように、その過程で形成された粘土層を利用した水田絆賞が行なわれたことが知られる。

そして、ある時点でそのような水害の被災地の土地改良を目的とするかのように客土が行なわれる(2層)。その時期については、それに掘り込まれたK1が下限を示す。2層からは、粗い格子目印きの施された平瓦小破片が、少数だが、出土しており、客土が平安時代のある時点まで行なわれたことが考えられるのでは、なかろうか。

そしてこの後、現代に至るまでおそらく変ることなく、水田基盤として利用が続けられてきたのであろう。

IV G6b区の調査

G6b区は台地の西端部にあたり、中央台地上でも水田域と接する部分に相当する。本調査区は台地に沿うように南北に長く、総延長135mのうち南側72m(5~8区)は河川部、北側63m(1~5区)は台地部分であった。台地部分は削平が著しく、表土からおよそ1~1.5m程、基盤層の八女粘土層まで旧水田の造成によって削られている。このため暗茶褐色の粘質土を含む不整な土壤以外には遺構を検出することはできなかった(図50)。この不整土壤は遺物を含んでおらず、時期・性格ともに不明であるが、旧水田に伴う水利施設の基底面の可能性もある。5区の中程で台地の落ち際を確認し、それより南側は暗青灰色混土砂層の堆積が認められた。この砂層の上には、落ち際部分において幅1m弱にわたって暗茶褐色粘質土が堆積しており、南側の

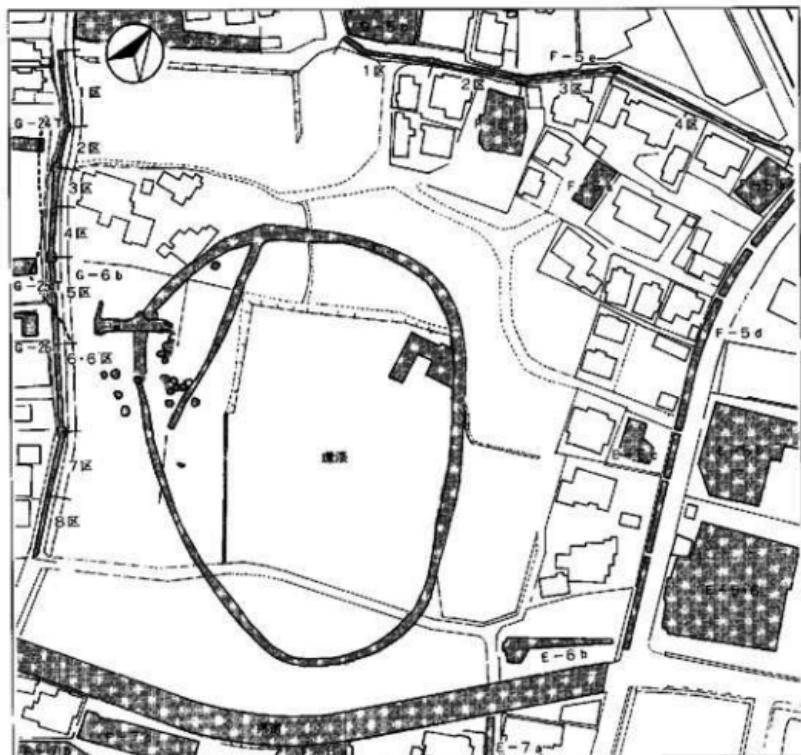


図47 調査区位置図 (1:1500)

6～8区でも厚さ20～30cmで調査区全体を覆っていた。台地部分の基本層序は地表から埋土(厚さ30cm)、旧水田土(厚さ20～40cm)、鳥栖ローム層もしくは八女粘土層となる。台地の落ち際から南の部分(5～8区)では、上から埋土(厚さ20～50cm)、旧水田土(厚さ20～40cm)、暗茶褐色粘質土層(厚さ20～30cm)、暗青灰混土砂層(厚さ60～90cm)、青灰色粗砂層(厚さ50cm以上)という土層の堆積状況を示す(図51・53)。この旧水田土下の3枚の土層にはそれぞれ第1～3層の名称をあたえ、出土遺物は調査区ごとに層位分けして取り上げた。この第1層は周辺部の調査結果から台地周辺を取り巻く平安時代後期以降の整地層であることが確認されている。また、第2層はG24～26トレンチで確認された木器包含層に相当するものと考えられる。第3層は、G7a・7b区、G26トレンチで確認された小河川(水路)内の堆積層と考えられる。この河川の岸部分にあたる5区では、第3層中に



図48 1区全景(北から)



図49 4区調査風景(南から)

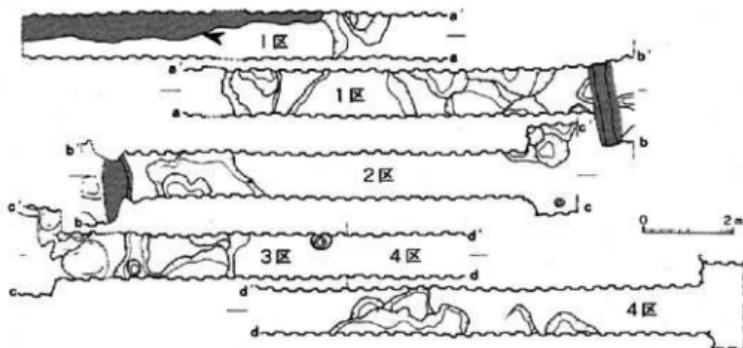


図50 1～4区全体図 (1:125)

径20~50cm大の鳥栖ロームの土塊が数多く混入しており、その下部の粗砂層中から夜白式土器、板付I式土器が出土した。この状況はG26トレンチとよく似ている。第2層はその堆積状況からみて、水成作用による堆積物と考えられ、河川の氾濫・洪水に伴い、台地上の遺物が洗い流され、堆積したものであろう。遺物は第1層を除いてそれぞれ各層の下部を中心に出土しているが、第3層は河床まで調査しておらず、下部の状況は不明である。第1層は多量の土器片を含んでおり、移植ゴテもとおらないくらいおびただしかった。

遺物は台地上からは殆ど出土しておらず、僅かにローリングを受けた弥生式土器片、須恵器片、黒曜石片が出土しただけである。出土量の殆どは台地の落ち際に南に堆積した整地層(第1層)、混土砂層(第2層)、河川中の粗砂層(第3層)からのものである。その量はコンテナ箱に換算しておよそ第1層—17箱、第2層—37箱、第3層—9箱である。以下、代表的な遺物について各層ごとに説明を加える。

なお、土器はできるかぎりすべてのタイプ・器形を網羅したつもりであるが、遗漏もある。石器、土製品については一括して説明を加えた。

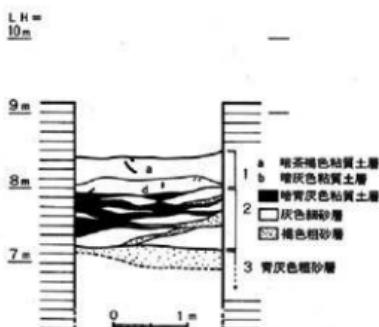


図51 第2セクション図 (1:75)



図52 5区台地の落ち際 (北から)

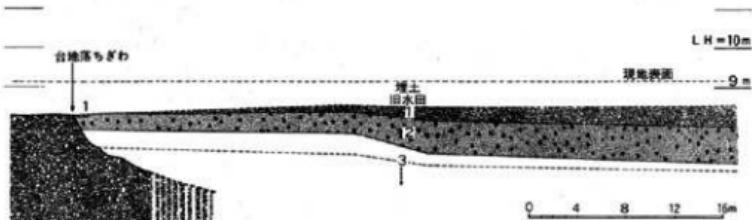


図53 5~8区土層堆積状況模式図

1 第1層（整地層）

整地層は5区より南の台地の落ち際から小河川の上部にかけて厚い堆積状況を示している。5区より北の調査区においては旧水田造成によりほとんど削平されている。よって遺物の大部分は5～8区にかけてのものである。

本層からは、青磁、須恵器、弥生式土器が出土した。図56は6区と6'区の間から一括して出土したものである。1は短頭壺で口縁部をほとんど欠いている。胴部に3.6×2.8cmの孔が穿たれている。色調は淡茶褐色で胎土は径2mm大の砂粒を含み、粗い。2は手捏の壺形土器である。色調は灰橙色で胎土に径1～2mm大の石英砂を多量に含む。3は丹塗りの短頭の小型壺である。底部は平底で、径2cmの孔が穿たれている。色調は灰茶褐色で、胎土は精良である。

図57：1は板付I式の壺形土器の頸部の破片である。文様はヘラによる3条単位の平行沈線と弧状八字形文である。2は夜白式の壺形土器の口縁部である。

口唇部に1形状の刻目凸帯を貼付する。ローリングを受け、摩耗している。3～7は丹塗土器で、壺形土器、高杯、瓢形土器、鉢形土器の破片である。この他、各種の丹塗土器がある。3は小型の壺形土器で、立ち上がり気味の口縁部が特徴的である。丹塗土器の胎土には砂粒をあまり含まない、精選されたものが用いられている。8は長頭壺の口縁～頸部片である。外面は縦方向のヘラによる磨きが施されている。色調は茶褐色で、



図54 6区調査風景（南から）

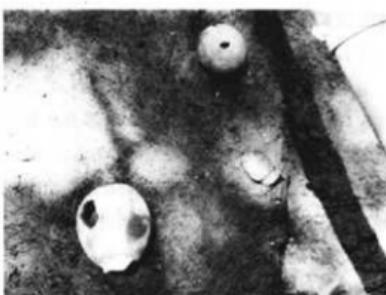


図55 6区遺物出土状況

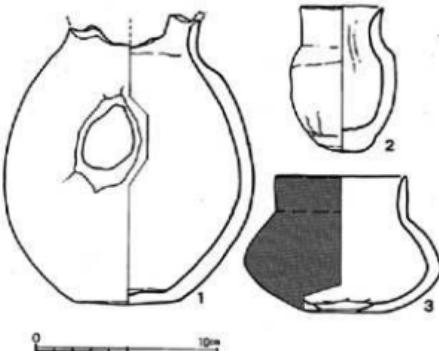


図56 第1層出土土器(1) (1:3)

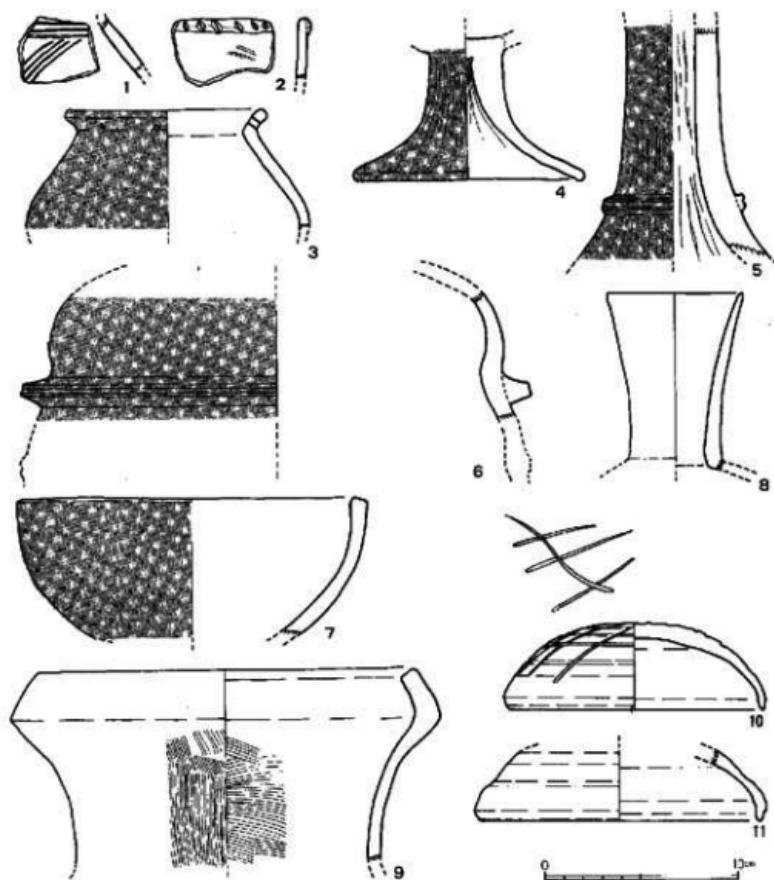


図57 第1層出土土器(2) (1:3)

胎上には径1mm大の石英砂を含む。9は二重口縁壺の口縁部片である。口縁の屈曲部の内外に僅かに棱をもつ。頸部以下はハケ目、口縁部はナデ調整で仕上げている。色調は茶褐色で、胎土には径1~2mm大の石英砂を多量に含む。10と11は須恵器の杯蓋である。10の天井部には「キ」字のヘラ記号がある。いずれも胎土は精良で、僅かに砂粒を含む。色調は10が紫灰色、11が青灰色を呈する。

2 第2層

第2層は、粗砂と粘質土の互層であり、水成作用によって堆積した層である。厚さは薄いところで60cm、厚いところで90cmを測る。遺物は第2層の上半部から主に出土するが、場所によっては第3層と連続するところもある。

出土遺物には、夜臼式土器、板付I式土器などの弥生前期の土器から中期後半の土器をはじめとして、各種石器、土製品などがある。

図60：1は夜臼式土器の縫形土器の口縁部片である。口唇部に一条の断面台形の凸帯を貼付し、その上に刻目を施している。刻目は胴部の調整と同じハケ目状工具による。内面は丁寧なナデ調整である。外面にはススが付着している。色調は黄茶褐色で、胎土には径3mmの大の石英砂を含んでいる。2は夜臼式土器の縫形土器の口縁部片である。口縁部が強く外反し、頸部への張り出しが顕著である。調整法はローリングを受け摩耗しているため不明である。胎土は砂粒をほとんど含まない精選されたもので、色調は淡茶褐色を呈する。3は板付I式土器の縫形土器の口縁部片である。口縁部は外反し粘土を貼り付け、肥厚させ段を有する。内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施している。色調は外面が明茶褐色、内面が暗茶褐色を呈する。胎土には径1mm大の石英砂を多量に含む。4は板付I式土器の頸部～胴部の破片である。頸部と胴部の境目に一本の沈線を引く。外面の調整はヘラ磨きで、内面にはナデによる指頭痕が残っている。色調は茶褐色で、胎土には径1～2mm大の石英砂を含む。5は板付I式土器の縫形土器の口縁部片である。如意形を呈する口縁部には一条刻目凸帯を貼付する。内外面とも調整はハケ目である。



図58 土器出土状況



図59 扱石器出土状況

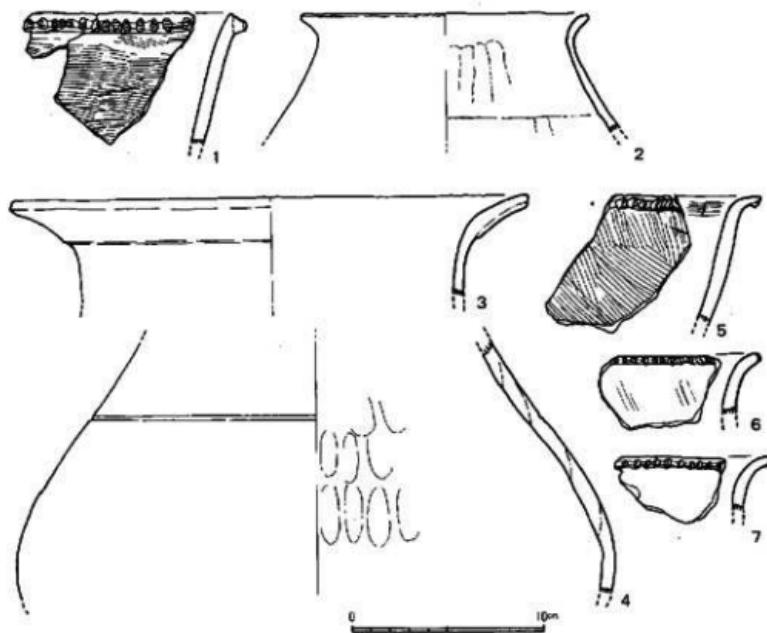


図60 第2層出土土器(1) (1:3)

が、内面の大部分はナデ消している。色調は外面が茶褐色で、内面が灰茶褐色を呈する。胎上には径2mm大の石英砂を多量に含む。6は板付I式土器の變形土器の口縁部片である。口唇部に刻目を施し、如意形に外反する。外面はハケ目、内面はヨコナデ調整である。色調は灰茶褐色で、胎土には径2mm大の石英砂を多量に含む。6も板付I式土器の變形土器の口縁部片であるが、5に比べて外反の度合いは少ない。口唇部に低い一条の刻目凸帯を貼付する。内外面ともヨコナデ調整である。外面にスヌが付着している。色調は茶褐色で、胎上には径1~3mm大の石英砂を多量に含む。

図61：1は夜臼式土器の変形土器の口縁部片である。口縁端が強く外反する。内外面とも摩耗が激しく、調整法は不明である。色調は橙色で、胎上には径1mm大の石英砂を含む。2は板付II式土器の變形土器の口縁部片である。逆L字形に外反する口縁部をもつ。外面は縦方向のハケ目で、内面はナデ調整である。色調は外面が茶褐色で、内面は黒褐色である。胎土には径1~2mm大の石英砂を多量に含む。3は鍔先状の口縁部をもつ変形土器である。口縁の平坦面はやや凹面状をなす。外面は縦方向の、内面は横方向のヘラ磨き調整である。色調は外面が茶褐色で、

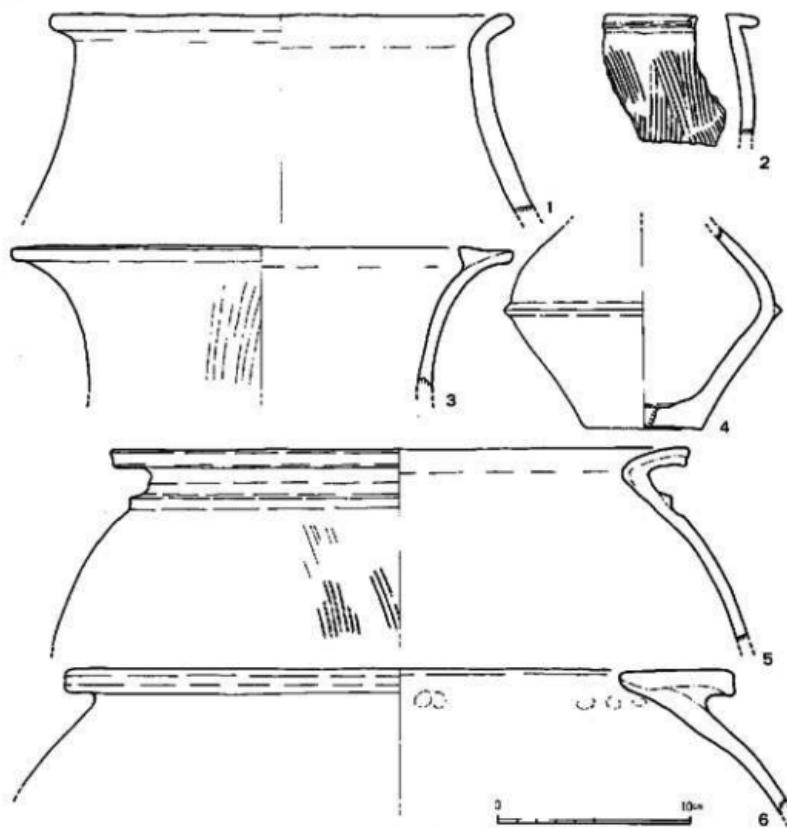


図61 第2層出土土器(2) (1:3)

内面が黒褐色を呈する。胎土には径1~2mm大の石英砂を含む。4は壺形土器の頸部~胴部にかけての破片である。胴部の中位に断面三角形の凸帯を一条貼付している。外面がハケ目、内面がナデ調整である。底部はやや凹む。色調は外面が灰茶褐色で、内面が白黄色を呈する。胎土には径2~3mm大の石英砂を多量に含む。5は大型の壺形土器の口縁部片である。逆L字形に鋭く外反する口縁部が特徴である。肩部に一条の断面三角形の凸帯を貼付する。外面は縱方向のハケ目、内面はナデ調整である。色調は内外面とも鮮橙色を呈する。焼成はやや脆弱である。胎土には径1mm大の石英砂を含む。8は大型の壺形土器の口縁部片である。歛先状の口縁部をもち、その上端面は平坦な面をなす。胴張りのする球形の胴部へ移行するものと考えられ

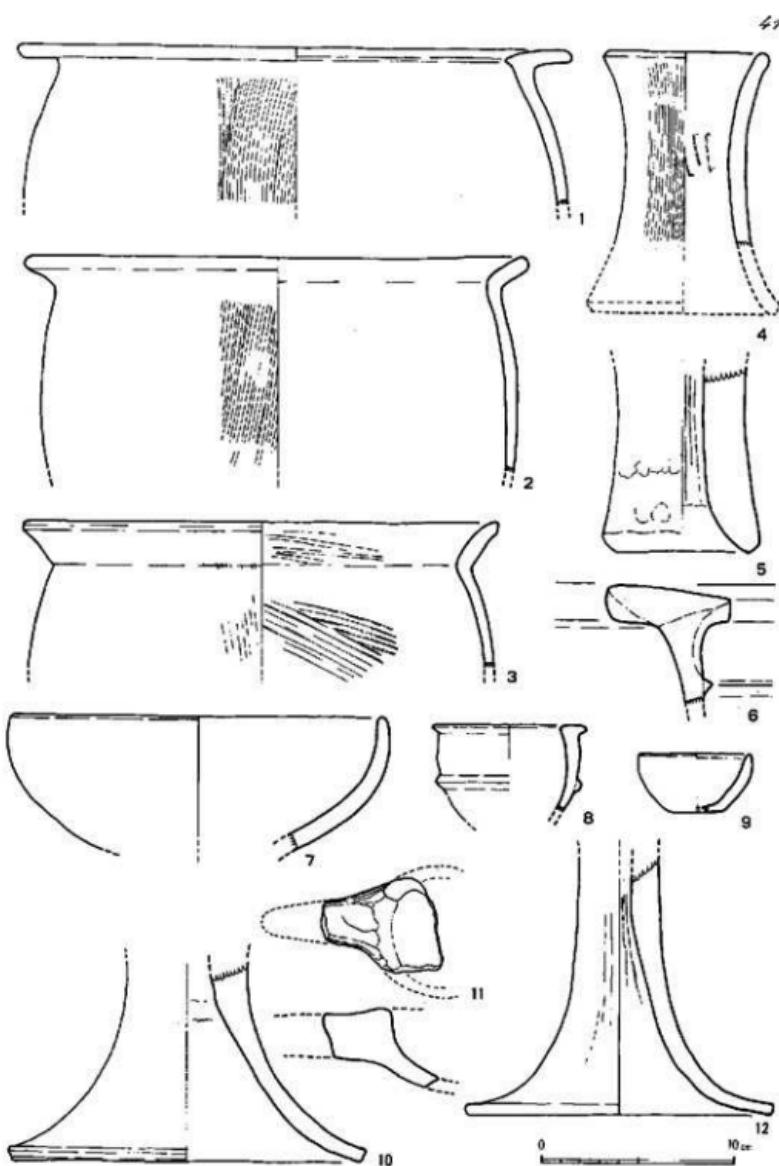


図62 第2層出土土器(3) (1:3)

る。器面が荒れているため調整法は不明であるが、口縁部内面には指頭痕を残している。色調は内外面とも鮮橙色で、胎土には径1~3mm大の石英砂を多量に含む。

図62: 1は逆L字形の口縁部をもつ壺形土器である。口縁部の内側の端部はつまみあげられたように張り出す。外面は縱方向のハケ目、内面はヨコナテ調整である。胎土には径1mm大の石英砂を含む。色調は内外面とも橙色を呈する。2はくの字形に外反する口縁部をもつ壺形上器である。口縁端部は丸味を帯び、頸部からゆるやかに外反する。外面は縱方向のハケ目、内面はヨコナテ調整である。外面にはススが付着している。色調は内外面とも灰橙色を呈する。胎土には径1mm大の石英砂を含む。3はくの字形口縁をもつ壺形上器の口縁部片である。口縁端部はシャープに作り上げ、鋭い稜をなして外反する。外面は縱方向、内面は横方向のハケ目調整で、一部ナテ消している。色調は外面が灰茶褐色で、内面が淡茶褐色を呈する。胎土には径2mm大の石英砂を多量に含む。4は器台の破片である。下半部を欠いている。外面はハケ目、内面はナテ調整である。色調は明茶褐色で、胎土には0.2mm大の極細砂を多量に含む。5は円筒形を呈する器古であるが、上半部を欠損している。器壁が厚く、2.3cm測る。外面にはナテ調整による指頭痕を留める。色調は白橙色で、胎土には径1mm大の石英砂を含む。焼成はややあく、脆弱である。6はT字形の口縁部をもつ成人用壺形の口縁部片である。重厚で口縁端部が内側へ張り出す。凸帶は断面三角形を呈する。調整は内外面ともヨコナテである。色調は明るい橙色で、胎土には径2mm大の石英砂を含む。7は杯形の土器片であるが、底部付近のカーブから高杯の杯部の可能性もある。内外面とも丁寧なナテ調整によって仕上げられている。色調は内外面とも暗橙色である。胎土には径1~3mm大の石英砂を含む。8は壺形のミニチュア土器である。内外面ともナテ調整である。色調は淡橙色を呈し、胎土には0.5~1mm大の石英砂を含む。9は鉢形のミニチュア土器で、内外面ともナテ調整で仕上げている。色調は淡橙色で、胎土には径1mm大の石英砂を少量含む。10は高杯の脚部片である。内外面とも淡橙色を呈する。調整はナテによる。胎土には径1~2mm大の石英砂を少量含む。12も高杯の脚部片であるが、丹塗上器の可能性もある。外面はヘラ磨き、内面はナテ調整である。色調は内外面とも淡橙色を呈する。胎土には径1~3mm大の石英砂を含む。11は柄杓形の土製品の柄と杯部の破片である。色調は灰褐色で、胎土には径1mm大の石英砂を含む。

図63は文様のある壺形上器片を図示したものである。1は胴部の中位よりやや上の破片であるが、4本の細沈線が認められる。刻線の間隔は下の方が僅かに広くなっている。色調は外面が淡茶褐色で、内面が黒茶褐色を呈する。胎土には径0.2mm大の細砂粒を多量に含む。2は断面三角形の凸帶をもつ壺形土器の胴部片である。凸帶より上位に4本の沈線文が認められる。刻線の間隔は下の部分が広い。外面は丁寧なヘラ磨きを施している。色調は外面が茶褐色で、内面が淡茶褐色を呈する。胎土には径1mm大の石英砂を含む。3は壺形土器の肩部の破片である。8本の細沈線文が認められる。刻線の間隔はやはり下の方が広い。色調は外面が白橙色、

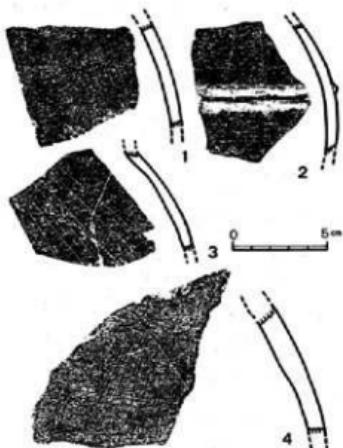


図63 第2層出土土器(4) (1:3)



図64 第2層出土有文土器

内面が淡赤褐色を呈する。胎土には径1mm大の石英砂を含む。4は胴部上位の破片であるが、外面に多數の細沈線によって三角形の文様を描いている。文様は確認できる限り16本の刻線で構成されるが、右側辺のものが最後に描かれている。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈する。胎土には径0.2mm大の細砂粒を多量に含む。

図65～67は丹塗土器である。器種としては壺形土器、甕形土器、高杯、蓋、筒形器台、瓢形土器などがあるが、その一部を図示した。図65：1は袋状口縁をもつ壺形土器で、底部を欠く。細い頸から張りの強い胴部へ移行する。頸部に一条の断面三角形の凸帯を貼付する。丹は外面の全面と内面の口縁～頸部にかけて塗布されている。胎土は灰茶褐色で、石英砂を含む。2は1と同じ袋状口縁をもつ壺形土器の口縁部片である。頸部には一状のM字凸帯を貼付している。胎土は灰茶褐色で、径1mm大の石英砂を含む。3は鋤先状の口縁部をもつ壺形土器の口縁部片である。頸部に一条の三角凸帯を貼付する。頸部の内外面にはハケ目調整痕を留めている。4も3と同じ鋤先状口縁をもつ壺形土器の口縁部片である。内外面の調整は横方向のヘラ磨きである。口縁端部がやや下方へ下がる。胎土は茶褐色で、細砂を含む。5は頸部にM字凸帯を数条貼付する壺形土器の頸部片である。残存部分で凸帯の数は二条であるが、凸帯間には縱方向の暗文を配する。胎土は灰茶褐色で、細砂を含む。6は小型の壺形土器で、ほぼ完形である。口縁部上に紐通しのための孔が4個穿孔されている。最大径は胴部の中位にある。底部へは内湾気味に移行し、底面はやや凹む。内面の丹は口縁の屈曲部まで塗布されている。胎土は灰橙色で、径1mm大の石英砂を含む。7は6と同じ小型の壺形土器の口縁部片であるが口縁部の屈

44

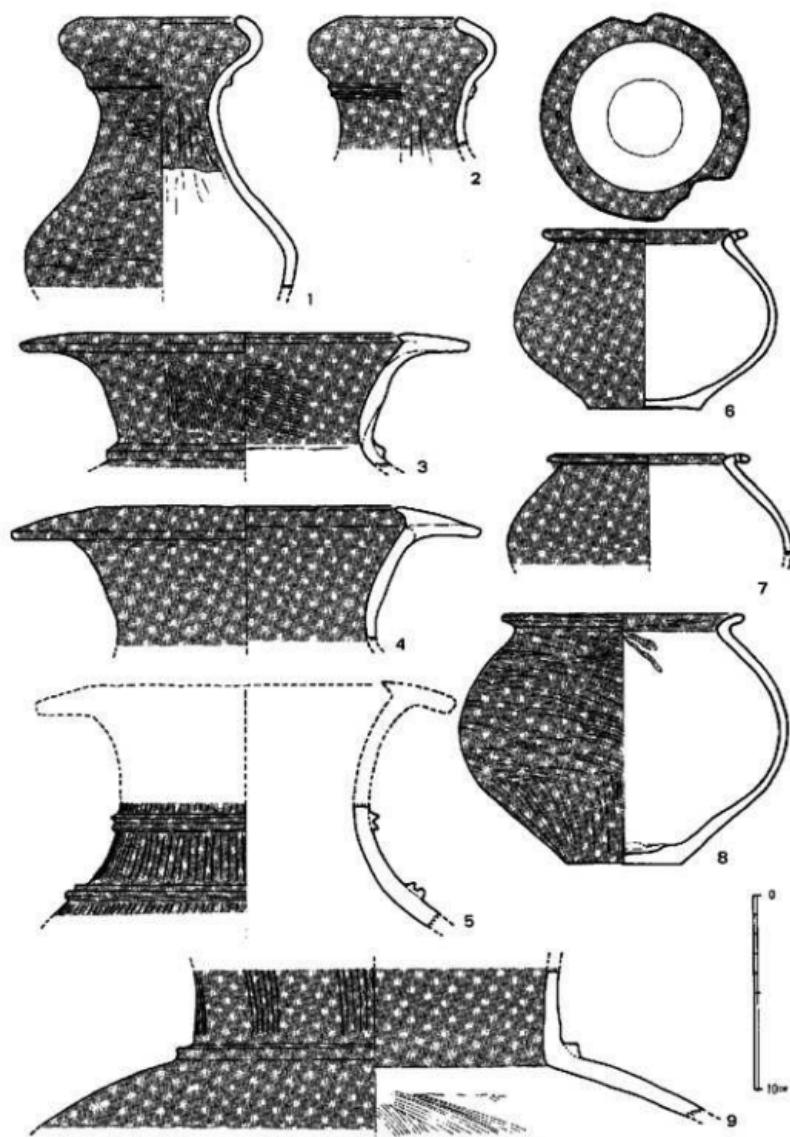


图65 第2层出土土器(5) (1:3)

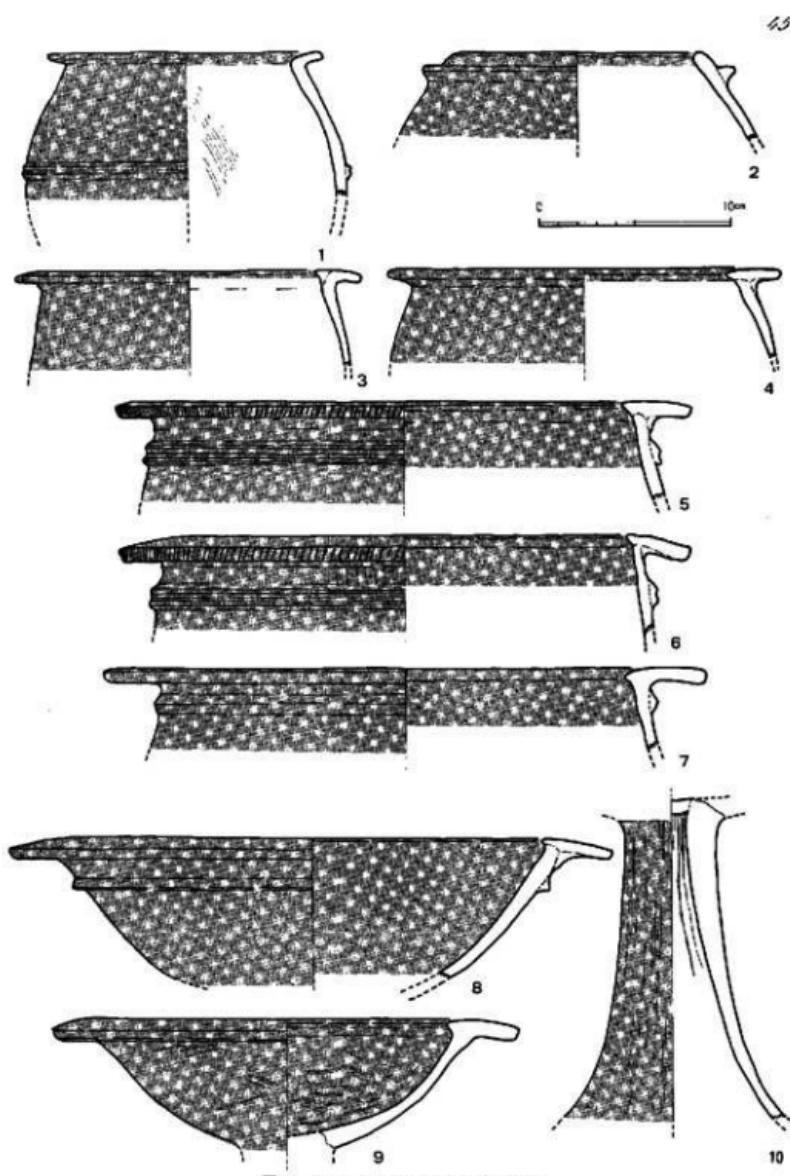


圖66 第2層出土土器(6) (1:3)

曲度が著しい。口縁部の上部に4個の穿孔がある。胎土は灰橙色で、細砂を含む。8は同じ小型の壺形土器である。口縁部が前二者に比べ立ち上がり気味であり、孔も穿たれていない。器面調整は胴部上半が縱方向、下半が横方向のヘラ磨きで、口縁部はヨコナナデ調整である。最大径は胴部中位にあり、底部は平底である。胎土は灰茶褐色で、細砂を含む。9は壺形土器の頸部～肩部の破片である。頸部に一条の三角凸帯を貼付する。凸帯～口縁部の間に6本単位の暗文を配する。丹は外面のすべてと内面の頸部まで塗布される。胴部内壁に斜め方向のハケ目を残すが、他はすべてナナデ消している。胎土は灰橙色で、径2mm大の砂粒を含む。

図66：1は小型の壺形土器の口縁部～胴部片である。口縁部は逆L字形を呈するが、僅かに立ち上がり気味である。胴部には一条のM字凸帯を貼付する。丹は外面のすべてと内面の口縁部まで塗布されている。胴部内壁に縱方向のハケ目を残す。胎土は黄茶褐色で、細砂を含む。2は直口縁をもつ壺形の壺形土器の口縁部片である。口縁部に断面台形の凸帯を一条貼付する。口縁端部は丸味を帯びている。胎土は淡橙色で、細砂を含む。3は逆L字形を呈する口縁部をもつ壺形土器の口縁部片である。器面調整は外面が縱方向のヘラ磨きで、口縁部と内面はヨコナナデである。胎土は灰橙色で、細砂を含む。丹は外面のすべてと口縁部の平坦部に限られる。4は5と同じ壺形土器の口縁部片であるが、口縁端がやや下方に下がる。肩も3に比べて張り気味である。器面調整はヨコナナデである。胎土には径1mm大の砂粒を含み、白橙色を呈する。5～7は大型の壺形土器である。5は逆L字形の口縁部をもつ壺形土器の口縁部片である。口縁端部に刻目を施す。口縁下にはM字凸帯を一条貼付

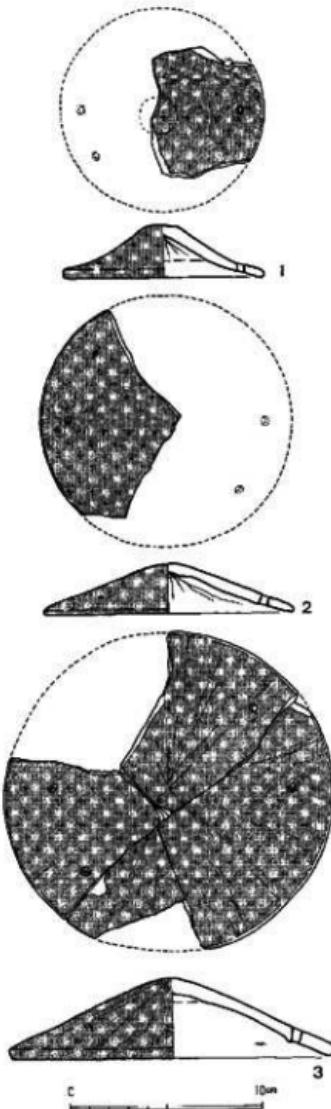


図67 第2層出土土器(7) (1:3)

する。内面の丹の範囲は3・4の小型の彫形土器に比べると広く、口縁部から2.5~3cmの幅まで塗布される。胎土は灰茶褐色で細砂を含む。6は5と同じ彫形土器の口縁部片であるが、鋸先状口縁の屈曲度が大きい。口縁端部に刻目を施す。口縁部下に一条のM字凸帯を貼付する。胎土は灰橙色で、細砂を含む。7は逆L字形の口縁部をもつ彫形土器の口縁部片である。口縁端部はやや丸味を帯びる。口縁部下に一条の三角凸帯を貼付する。胎土は白橙色で、径1mm大の石英砂を含む。8は高杯の杯部の破片で、脚部を欠いている。口縁部は鋸先状を呈し、端部は下方へ下がり気味である。口縁部下に一条の三角凸帯を貼付する。胎土は灰橙色で、径1mm大、4mm大の砂粒を含む。9は鋸先状口縁をもつ高杯の杯部であり、脚部を欠く。内外面の調整はヘラ磨きである。口縁端部は肥厚し、シャープに仕上げている。胎土は灰橙色で、細砂を含む。10は高杯の脚部であるが、裾部は欠損している。器面調整は縱方向のヘラ磨きである。胎土は灰橙色で、細砂を含む。

図67: 1~3は小型壺形土器の蓋である。1は径10.6cm、高さ2.8cmを測る蓋の破片である。上部に平坦面をもつ。器面調整はナデによる。胎土は白茶褐色で、径1mm大の砂粒を含む。2は径11.2cm、高さ2.6cm測る蓋の破片である。胎土は白茶褐色で、細砂を含む。器面調整はおそらくナデによるものであろう。3は径17cm、高さ4.2cm測る。器面調整はヘラ磨きによる。胎土は灰橙色で、径1mm大の石英砂を含む。

図68の木製品は6区と7区の境、第2セクションの南側から出土した。出土層準は第2層下

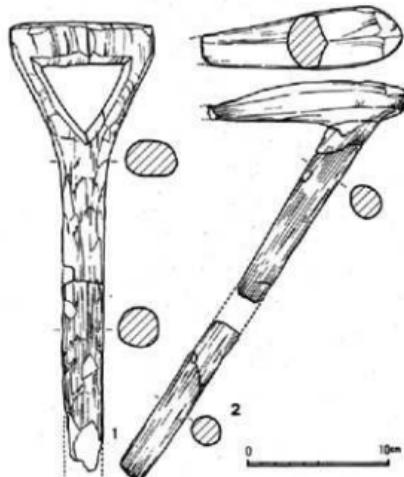


図68 第2層出土木器 (1:4)



図69 木器出土状況

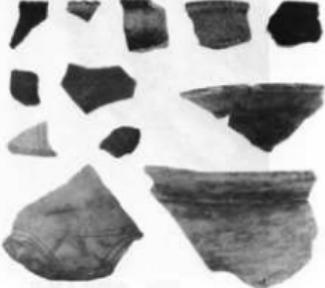
部の粘質土層で、流木や葉などと共に出土した。この層はG24～26グリッドで確認された木器包含層に相当する。1は鎌の柄の握部である。樹種はカシである。握部は断面六角形、柄部は円形に仕上げている。板状の素材を用いている。2は斧の柄の未製品である。幹と枝の部分を素材に用い、枝の部分を柄に使用しようとしたものである。石斧の装着部は粗い加工のままで、柄部は表皮を剥いた状態である。柄の中間部を欠失する。樹種は不明である。

第2層は出土遺物から見ると、弥生前期から中期にかけての時期をあてることができるが、前期初頭の夜白・板付I～II式土器は第2層から紛れ込みと考えられる。板付市営住宅建設の際のG25・26グリッドの調査では、弥生中期を主体とする木器包含層（第2層相当層）の下部の粗砂層から夜白式土器、板付I・II式土器などの前期の土器が若干出土している。また今回の調査でも第3層より該期の土器を検出しており、冒頭で述べたように層位的に遺物群を分離できない個所があったことにも原因が求められるであろう。これは本層の形成が水成作用による堆積に起因するためと考えられる。よって、第2層の形式は弥生時代中期それも後半に相当する時期と考えられる。

図70 第1・2層出土石器・土製品



図71 第3層出土土器



3 第3層

第3層は第2層下の青灰色粗砂層で、5区の台地の落ち際から8区まで調査区全域にわたって堆積している。調査は地表からの深さ約2.5m(標高6.7m)まで実施し、八女粘土層面(河床面)までは達しなかった。5区の台地の落ち際付近では砂層中に鳥栖ロームの土塊が数多く混入しており、その下部より、夜白式土器、板付I式土器などが出土している。本層には第2層とは逆に弥生時代中期の丹塗土器や日常容器、甕棺などの新しい土器が粉れ込んでいるが、これも先述の理由で本来の時代性を示すものとは思われないため、前期の土器のみ図示した。

図73: 1は夜白式の壺形土器の口縁部片である。胴部でくの字形に反転するタイプである。

刻目凸帯は断面台形を呈する。器面調整は外面が貝殻条痕文で、内面がナテによる。色調は灰茶褐色で、外面にススが付着している。胎土には細砂を含む。2は内傾しながら立ち上がる夜白式の壺形土器の口縁部片である。口唇部に直接刻目を施す。器面調整は外面が板による擦過で、内面がナテによる。色調は灰茶褐色で、胎土には径1~2mm大の石英砂を含む。3は内傾しながら立ち上がり、口縁端部が如意形を呈する板付I式の壺形土器である。僅かに凸帯を意識している。器面調整は外面が縱方向のハケ目、内面がハケ目をナテ消している。色調は灰茶褐色で、外面にススが付着している。胎土には径2mm大の石英砂を多量に含む。4は3と同じタイプの板付I式の壺形土器の口縁部片である。やや肥厚した如意形の口縁部をもつ。器面調整は縦方向のハケ目をナテ消している。色調は外面が茶褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土には径1~2mm大の石英砂を多量に含む。5も3・4と同タイプの壺形土器である。薄い器壁と間隔の狭い刻目が特徴的である。器面調整は内外面ともナテによるが、外面にはススが付着している。色調は灰茶褐色で、胎土には細砂を含む。6~8は板付I式土器の大型の壺形土器である。6は外反する口縁外面に粘土を貼付し、下方に段を形成するいわゆる板付I式土器の壺形土器の典型である。7・8はこれに比べ、あまり明瞭な段を形成せず、夜白式の壺形土器からの変化の過程をよく示している。6の下地の調整はハケ目、器面調整は横方向のヘラ研磨によるものである。外面と口縁部内面の約3cm幅に丹塗りを施している。胎土は灰茶褐色で径1mm大の石英砂を含む。7は器面全体をヘラによる横方向の研磨で調整し、外面全体と口縁部の内側に丹塗りを施している。口縁部外面の段はあまり突出しない。色調は淡い赤茶褐色で胎土



図72 第2セクション

50

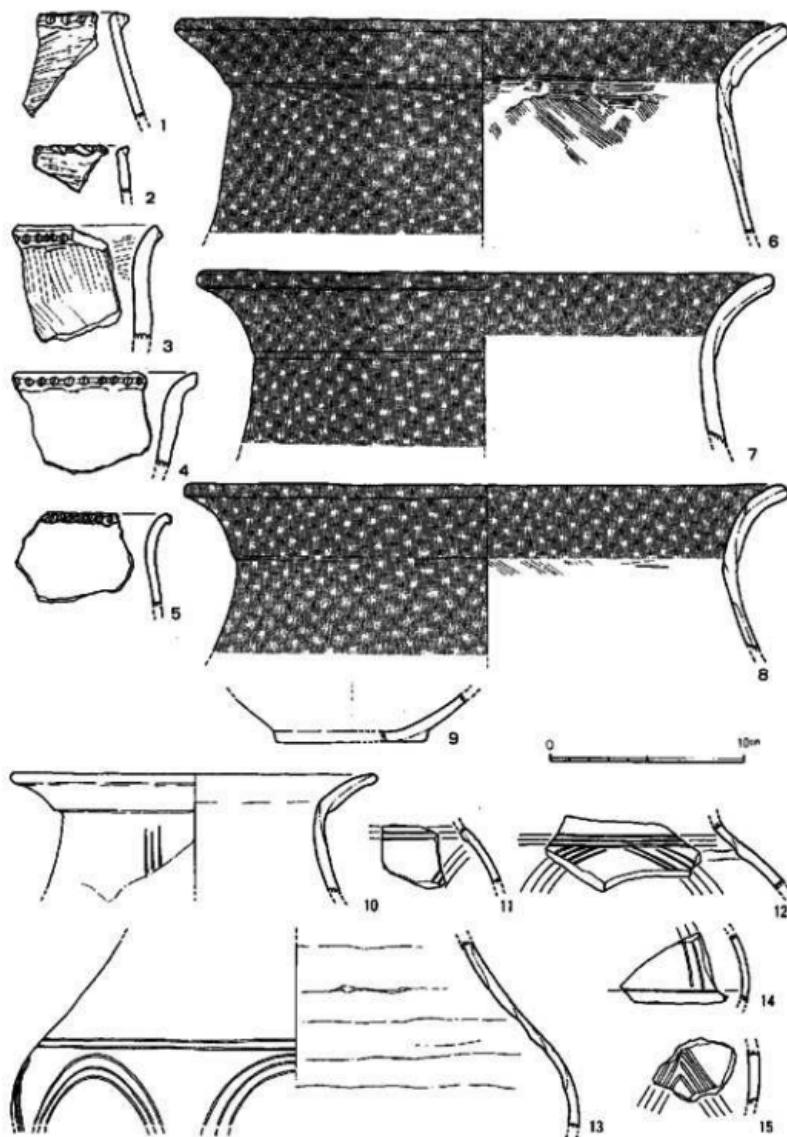


図73 第3層出土土器 (1:3)

には径1mmの大石英砂を含む。8は7に類するが、やや口径が大きい。下地の調整はハケ目によるが、外面を横方向のヘラ研磨、内面をナデによって消し去っている。外面全体と口縁部内面に丹塗りを施している。胎土の色調は茶褐色で、径1mmの大石英砂を含む。9は夜白式の壺形上器の底部と思われる。端部は台形状に張り出しているが、安定した平底である。内外面とも黒褐色で、器面調整はナデによる。胎土は砂粒をあまり含まない精良なものである。10~15は板付I式の有文の壺形土器であるが、いずれもヘラ削きによる沈線文である。10は口縁部の破片であるが、3本単位の垂直方向の沈線文を有する。その数は不明である。器面調整は横方向のヘラ磨きである。色調は外面が暗茶褐色で、内面が茶褐色を呈する。胎土には石英砂を含む。11は肩部の破片である。頸部に3本の平行沈線文を描き、その下部に複線弧状八字形文を配している。色調は外面が暗茶褐色で、内面が灰茶褐色を呈する。胎土には細砂を含む。12は同じく頸部の破片である。頸部に3本の平行沈線文、その下に4本単位の複線弧状八字形文を描く。頸部内面に接合の棱を有する。器面調整は外面がヘラ磨き、内面が丁寧なヨコナデによる。色調は灰茶褐色で、胎土には細砂を含む。13は頸部~胴部の破片である。その境にヘラ削きによる2本の平行沈線文を描き、その下に3本単位の複線弧状沈線文を8個配する。器面調整は外面が横方向の丁寧なヘラ磨きで、内面がヨコナデによる。内面には粘土帶の接合部の段が明瞭に観察できる。色調は外面が灰茶褐色、内面が茶褐色を呈する。胎土は細砂をふくみ、精良である。14は胴部の破片であるが、器壁がかなり薄い。1本の水平沈線文の上に3本単位の複線弧状八字形文を描いている。外面の器面調整は摩滅が激しく不明瞭であるが、内面はナデによる。色調は外面が灰茶褐色、内面が暗茶褐色を呈する。胎土には細砂を含む。15は複線山形文を描いた胴部の破片である。4本単位の沈線で、他に比べ浅く広い。器面調整は内外面ともナデによる。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈する。胎土には径1~2mmの大石英砂を含む。文様のある壺形土器はすべて細片で、全体的な文様構成は不明なものが多い。

なお、本層からは板付II式土器も若干出土しており、ほぼ弥生時代前期におさまると考えられる。これは、8区のすぐ南西隣にあたるG7a・b区の調査で確認された水田址と付属施設を伴う夜白式土器~板付II式土器期の小川の堆積層と同じで、その下流にあたるものと考えられる。

4 第1・2層出土石器・土製品

第1層と第2層からは石庵丁、磨製石鎌、石鏃、石錐、石斧、磨石、砥石などが若干ではあるが出土している。いずれも破損しているものがほとんどで、その一部を図示した。

石庵丁 (図74: 1~3)

1・2は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製、3が凝灰岩ホルンフェルス製の石庵丁である。

いずれも略半分を欠損し、紐孔は1つしか残っていない。外湾刀の半月形のものである。1と2は第2層、3は第3層からの出土である。

石鎌（図74：4）

4は安山岩製の石鎌の破片である。打撃による剥離を周辺に加え粗整形を行い、刃部は両面から研ぎ出している。基部に繋縛のためのノッチを入れている。第2層から出土した。

打製石鎌（図74：5）

5は黒曜石製の打製石鎌である。ほぼ三角形を呈するが、基部が僅かに凹む。第2層から出土した。

磨製石鎌（図74：6）

貞岩製の有茎の磨製石鎌である。丁寧な研磨によって柳葉形に仕上げる。基部を僅かに欠損している。第2層から出土した。

滑石製未製品（図74：7）

7は滑石製の筋錐車に類する板状の未製品の破片である。中央に穿孔途中の凹みがあるが、正円形を呈さないことから筋錐車の可能性は少ない。第2層から出土した。

上製勾玉（図74：8）

8は土製の勾玉と思われる。下半部を欠損する。あまり湾曲しないノの字形をなす。白茶褐色を呈し、石英砂を含む。

投弾（図74：9～11）

9～11は土製の投弾である。9が黒褐色、10と11が白橙色を呈する。重量は順に11.4g、16.2g、13.2gである。すべて第2層から出土した。

石斧（図75：1・2）

1は柱状抉入片刃石斧の頭部片である。石材は貞岩である。刃部は抉りの部分で折れているが、その後叩き石として再利用している。2は安山岩製の蛤刀石斧の刃部片である。1・2とも第2層より出土した。

磨石（図75：4）

安山岩製の円礫を利用した磨石（四石）である。略半分を欠損するが、両面の中央に凹みをもち周辺は敲打痕を留めている。表裏面とも滑らかである。第2層より出土した。

砥石（図75：3・5）

3は白色を呈する砂岩製の砥石である。四角柱形の形態をなすが、両端を欠損する。全面が延面であるが、1面は極端に凹む。石質、焼痕などから焼型の再利用品の可能性がある。第1層より出土した。5は暗緑色の砂岩製の砥石であるが、3側辺を欠損している。よって砥面は表面と1側面であるが、とくに側面の砥減が激しい。第2層より出土した。

この他、黒曜石の不定形な削片が多数出土している。

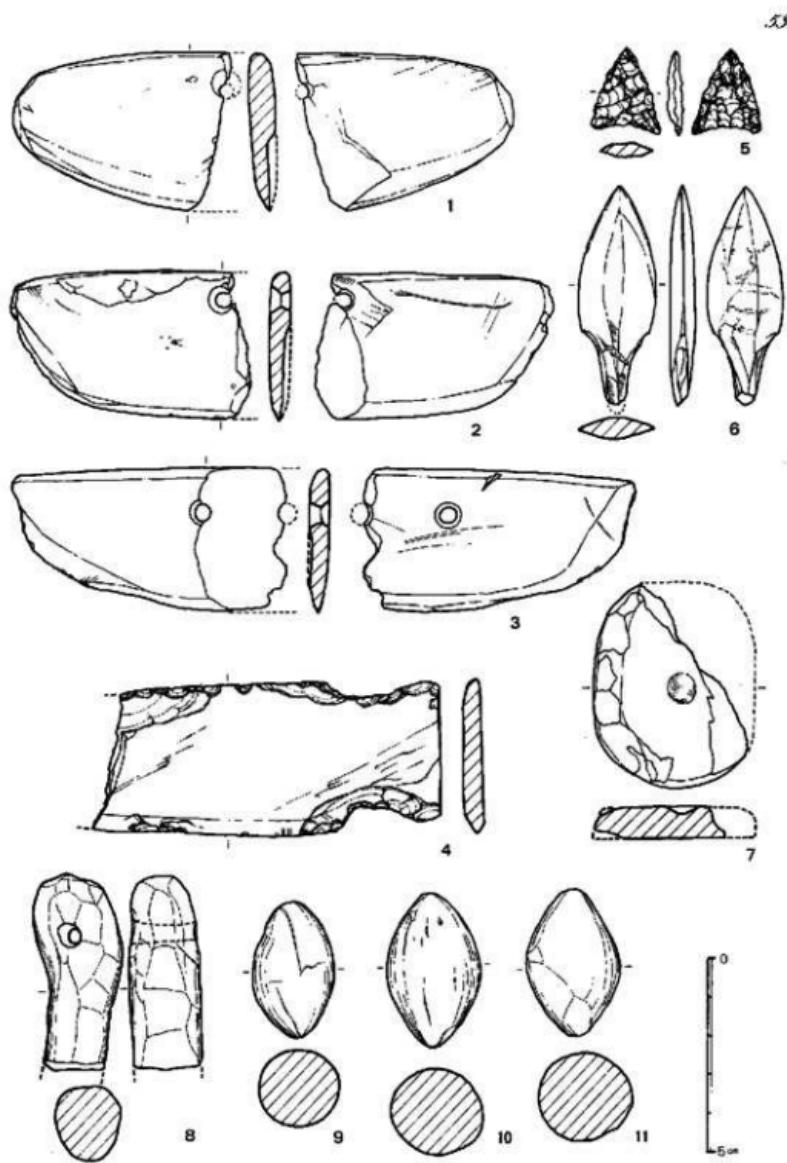
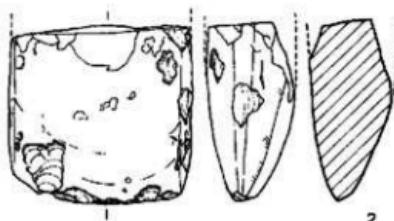
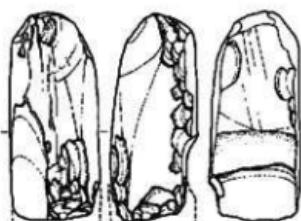
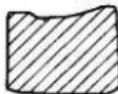
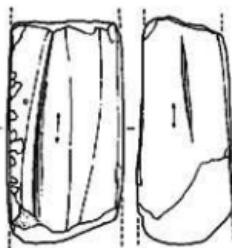


図74 第1・2層出土石器・土製品(1) (2:3)

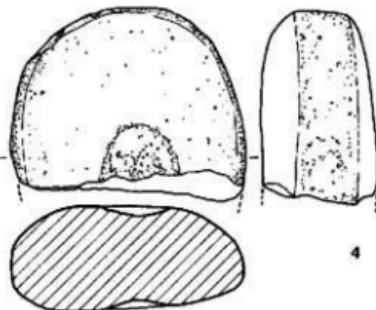
56



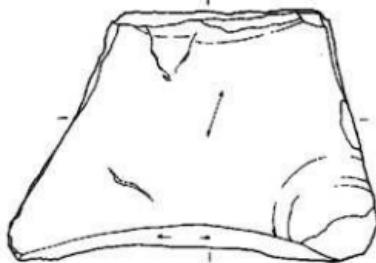
2



3



4



5



図75 第1・2層出土石器・土製品(2) (14:30)

V F5e区の調査

F5e区は環濠の北100mにあたり、台地を横切るように東西に伸びる調査区である。調査区は全長約122mであるが、東側の50m(4区)は旧水田の造成によって1~1.5m程削平されており、遺構は検出できなかつた。これに対し、西側の70mの部分は台地上でも比較的高いところにあたり、島栖ローム層面で遺構を検出した。地表面の高さは2区の東端付近が一番高く、東西へ向かうにしたがって低くなつており、調査区の最東部で-1.8mまで削平を受けている。この2区の地表面の最も高い部分で、現地表面から約40cm下(標高8.9m)である。1~3調査区の北側20cmと南側の20cmは旧水田の段落ち部と上水道管の埋設溝であり、ほぼ全区にわたつてこの搅乱が認められた。このため遺構の残り具合は良くない。検出した遺構は僅かに柱穴9個であるが、1区東側の2個の柱穴は形状・覆土がよく似ており、一連の建物の跡と考えられる。覆土中より弥生式土器の細片が出土しており、弥生時代に属するものと考えられる。このように旧生活面が後世にかなり削平を受けているため、この2個の柱穴以外からは僅かに摩擦した土器の細片を得たにすぎない。F5e区の基本層序は、上から埋土・旧水田耕作土・地山である島栖ローム層もしくは八女粘土層で、場所によってその厚さが異なつてゐる。



図76 1区全景(西から)

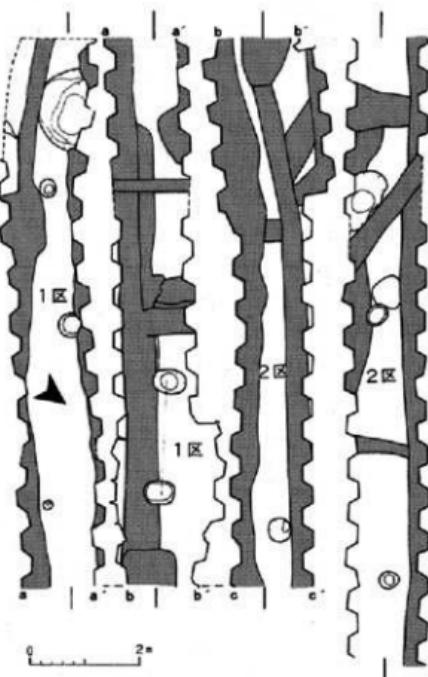


図77 1・2区全体図(1:100)

VI おわりに

今回の下水道付設にかかる調査は、中央台地を中心として環濠を取り囲むような形で実施されたF5d区・F5e区・G6b区と環濠南端から南東に位置するE7a区がある。調査の性格上1m幅のトレンチ調査ではあったが、その距離が長く広範囲に及ぶため中央台地付近の旧地形の復元にはある程度成果をおさめることができた。台地の端については、E7a区で東縁部の段落ち部を、G6b区では西側のGラインの続きの落ち際を検出している。このE7a区においては、段落ち部から南側において二枚の水田面を検出しており、そのうちの下層水田は板付I～II式期に比定できる。当該期の台地東側の水田はE5b区以外に環濠（集落）の東南部でも確認されているが、台地の滴入部の縁辺までひろがることを明らかにできたことは大きな成果であった。また、G6b区ではこれまで知られていた台地の落ち際と台地に沿って流れる小河川を再確認できたが、この小河川は今のところG7a・G7b区の板付I～II式期の水田の東を北流する川で、このG6b区5区で流路をやや北西へ変えている。その後、台地の西側一帯はより西方にあった旧緑岡川の出水・氾濫による影響を受け、土砂の流入や堆積が頻繁に繰り返されたと考えられる。この砂層と粘質土の互層を形成した河川跡はJ-K25トレンチ、J26トレンチで確認されており、以前の調査でもこの河川の砂層中から中期後業を主とする土器が多量に出土している。この土器のなかでも丹塗土器の出土量が多く、中期における河岸での祭祀的行為の存在が推測されているが、今回の調査でも多量の丹塗土器が出土している。

F5b区・E5d区・F5d区から以東に広がる整地層は、中央台地の西側でも確認されている。旧知見と総合するとこの整地層の範囲は中央台地の東西両側にかなりの面積でひろがっていることがわかる。また、その時代も奈良時代から平安時代であることが今回の調査でも追認できた。東西の整地層はいずれも河川の氾濫原ともいべき台地の縁辺部と沖積地の埋立てを意図したもので、台地の削平を伴う大規模な土木工事であった可能が高いと考えられているが、その性格についてはまだ問題が多い。

引用・参考文献

- | | | |
|----------|------|---|
| 井関弘太郎 | 1983 | 『沖積平野』UP Earth Science 12. |
| 古川 博志 | 1976 | 「地形・地質」板付市當住宅建設にともなう発掘調査報告書
1971-1976』福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 17-26頁 |
| 森田 勉 | 1983 | 『太宰府の出土品3 土器・陶磁器』仏教美術146 64-79頁 |
| 柳沢 一男ほか編 | 1985 | 『板付周辺遺跡調査報告書(10) 1984年度調査概要』福岡市
埋蔵文化財調査報告書第115集 |
| 山口 謙治編 | 1981 | 『板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集 |

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第135集

板付周辺遺跡調査報告書(1)

1986年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷 正光印刷株式会社